

---

# 何か

茶夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

何か

### 【Nコード】

N5517T

### 【作者名】

茶夢

### 【あらすじ】

魔法とか異世界とか書いて見たくて、書き始めました。

ファンタジーっぽい「何か」です。

R15は、残酷描写とか書いてしまった時の為のものです。

エロさは多分無いです。

冒険者ギルド創成の話になりそうです、たぶん？

## プロローグ(前書き)

ぼーっと書いていきます。

## プロローグ

プロローグ（博士の異常な感情）

とある地方都市の郊外。

最近、開発された新興住宅地から少し、いや……かなり離れた山の中腹にその屋敷があった。

元はさぞかし名のある者が住んでいたのか、かなり贅を凝らした造りなのだが。

今は碌に手入れもされていないのだろう。

周囲の森に半分飲まれかけている始末。

おりしも今は、真夜中。

満月ということもあって、周囲はかなり明るいが、月光に照らされた屋敷は、どう見ても無人の廃屋。

例え住んでいたとしても、幽霊だけではないかという風。

そのお化け屋敷の半地下の部屋。

天井にほど近い場所にある明かり取りの窓から差し込んだ月の光が、一人の青年の影をぼんやりと床に浮かび上がらせていた。

「ついにこの時が来たかつ！！来てしまったというのかつ！！」

幽玄と霞む世界にあって、一人青年だけが、鬱陶しいくらいの存在感を示していた。

「見よ！ついに僕はやり遂げたのだっ！」

しばし、闇に沈んだ半地下室の天井に顔を向け何かを耐えるよう

に身体を震わせていた青年だったが。

「まあ、感激はこのくらいにして、と」

いきなりテンション下がりを繰り返しの、どこのボーカロイドですか、な声音で呟いた。

「いやあ、長かった。爺ちゃんが若い頃からって言うから、かれこれ半世紀以上？……三代に渡る研究が完成しました、まる、っと」

手元のノートパソコンに打ち込み、上書き保存した文書を、今までの資料や何かと一緒にネット上の複数の場所に保管する。

一見、大切なものを保管する方法としては、間違っているようにも思われるかもしれない。

だが、特に誰も注目していないという条件下なら、適正な暗号化さえしておけば、かなり安全と言って良い。

少なくとも、長期間留守にする無人の場所に、物理的な何かで残して行くよりは、よっぽどマシだ。

物理的な記録は複製を作れば作るほど、機密漏洩の危険性が増えるが、かと言ってオリジナルをひとつだけにした場合、まかり間違つて盗まれたり、焼失したりでもしたら、目も当てられない。

「さて、後は実践とデータ取りって……何気に一番面倒だよなあ」

相変わらず、抑揚に乏しい声音で独り言ちる青年。

「何で僕の代で完成しちゃったかなあ。はあ。僕が天才すぎるのがいけないのだけど、それにしてもなあ」

年齢は二十代半ばと言ったあたりか。

とくに美形でもないし不細工でもない至って平凡な顔。

そこに面倒くさいという表情を貼りつけた青年は、名前を「白戸三郎（しらどさぶろう）」という。

突っ込まれる前に言っておくが、某ホワイトファミリーとは、何の関係もない。

なおかつ、上に兄や姉がいたりもしない。

「三郎」という名前は、研究を始めて三代目というナンバリングなのだ。

「白戸・ザ・サード」……そういうことだ。

「面倒だよなあ……はあ」

三郎は、もう一つ切な気な溜息をつき。

あまり手入れをしていない故にぼさぼさの黒髪を軽く片手でかき回して唸った。

「むう。とりあえず、ぼつとしてても仕方ない。始めるしかないか…… ええと、理論は完璧だから…… 残る問題は、この寄せ集めの部品で作った装置の信用性の検証…… あ、いや待てよ。何よりも先に装置に名前つけないとか」

ふむ。

と、これだけは、誰にでも褒められるしなやかなでなめらかな手（いわゆる怠け者の手とも言つ）、その左手の人差し指と親指を顎に当てて考え込む三郎。

「『次元転移偏在粒子不確定上書き装置』とか、いちいち呼ぶの面倒だしな……というか、考えるのも面倒……もう『凄い特殊装置』略して『STS』でいいや、短いし」

極めてなげやりに名前を決めた後、三郎は、これだけはデジタル化していなかった資料を取り出した。

「完成後に開封のことか……」

古びた油紙に包まれた一冊の帳面<sup>ノート</sup>。

そこには、三郎の祖父が、何を目指して研究を始めたかが書いてある筈だった。

「こっちは、母さんのと……」

自分の父親から研究を受け継いだが、研究そっちのけで世紀の大恋愛の末駆け落ち、離婚、あげくに飛行機事故で死亡と、ハリウッド映画並のドラマティックな人生を送った母親からのメッセージが入っている筈DVDを引っ張り出す。

「どれどれ……一体何が……」

一時間後。

マッドなドクター三代目こと白戸三郎は、頭を抱えて床に崩れ落ちていた。

「ファンタジーな世界で、天下無双な英雄で、ハーレムエンドって……ギャルゲーRPGもない時代にどうやってそんな都合主義な展開を思いつけるのか……天才すぎますお爺さん」

古びた帳面<sup>ノート</sup>には、確かに三郎の祖父の夢が記してあった。

本職かと思まごうばかりの写実的で美麗な筆致の挿絵まで付けられた「それ」は、端的に言えば極めて「廚二病」的だった。

若気のいたりでは済まされない、青春の甘酸っぱい黒歴史確定と  
いう感じだ。

こんなものが、うっかり人目に晒されでもしたら、もう恥ずかしく  
て街も歩けないレベル。

「吾輩は、いつの日にか辛い現実を離れ、理想の世界に旅立たん…  
…ってただの現実逃避じゃないか」

喉の奥から、苦鳴がもれるのを抑えられない。

おまけに。

「男装の美少女、女装の美少年、どっちもありありって……それだ  
けの内容を三十分も熱く語り続けるなんて、お母さんがそんな人だ  
とは思わなかった」

知らなかった自分の親の本性に、追い打ちをかけられている三郎。  
かなりへこまされたかに見えたが。

「……と、まあ、落ち込むのはこれくらいにして」

すつくと立ち上がり、何事もなかったように冷静な顔つきに戻る。  
人生のほとんどの時間を、STS開発に注ぎ込んでいた弊害か特  
性が、立ち直りだけは早い。  
いちいち落ち込んだり興奮しては、時間を無駄に消費するだ  
けだからだ。

「まあ、遺言だし、出来るだけ近い形には……はあ、一面倒臭い」

STSに向き直り、何やら一連の操作をし始める。

「……よし、タイマーをセットして、と」

操作を終えると、雑然とした部屋に不自然に空いたスペースに移動する。

その部分の床には、透明な強化ガラスが嵌め込みにされており、下には光ファイバーによって複雑な紋様が描かれていた。

見る者が見れば、それが魔法陣と呼ばれるものだということが分かったかもしれない。

タイマーのカウントダウンが進み、魔法陣の輝きが眩しいほど強まる。

三郎の姿が一瞬、瞬いたように揺らぎ。

次の瞬間、床に転がっていた。

「ぎゃー！痛い痛い……って、あれ？痛くない？」

ハアハアと荒い息をつきながら、起き上がった三郎は、自分の身体をペタペタと撫で回し。

はあ、と大袈裟な溜息をつくると床に座り込んだ。

「……なるほど、身体情報は一方通行だったよ、そう言えば。……にしても、その瞬間は痛いし、怪我レベルだと痛みがずーっと続くな、もしかしなくても……」

ぶるつと身体を震わせた三郎は、あーとつめき声を上げて、ぐしゃぐしゃと髪の毛をかき乱し、身体を縮こまらせた。

チワワのように震えていた、と見えたが。

「……と、まあ、悩むのはこのくらいにして」

ぼんぼんと、埃を払いながら立ち上がると、何事もなかったかのように感情を削ぎ落とした顔つきに戻り。

「こんな嫌なこと、僕がやる必要無いよね。他人にやらせれば問題ないか」

鬼畜な台詞を淡々と呟いた。

こうして、物語は始まる。

## 始まり（前書き）

まだまだ話が見えませんか（^^）；

## 始まり

### 第一話 始まり

その日、藍田康介は朝から嫌な予感がしていた。

彼の直感あいたたこひすけは、悪ければ悪いほど、よく当たることで知られている。その優秀な直感で、何度か大難を逃れたこともあるから、馬鹿には出来ない。

もつとも、大抵は、そのまま悪いことに巻き込まれるのが常だった。

悪いことが起こるのが分かっているのに、避けられないということとを不思議に思われるかもしれないが。

それは、康介の現在の身分や環境に原因がある。

例えば、過去にはこんな事があった。

ある日、その時から二週間、家から一步も出なければ災難に遭わないということが、康介の優秀な直感によって判明した。

だが。

しがない一高校生である康介としては、まさかテスト期間中ずっと家に閉じ籠もるといふ無茶ができる筈も無い。

嫌々ながら出掛けざるを得ず。

結果として見事に交通事故に遭い、お気に入りのマウンテンバイクがスクラップになる事となった。

康介本人はと言えば、予知と言っても良い長期的直感とは別の、本当に物事の直前に働く短期的直感によって、傷一つ負っていないが、つたが。

そう。

悪い出来事に巻き込まれながら、未だに康介が大きな怪我也せず、悲觀的もならず生きていけるのは、短期的な直感によるところが大きい。

康介をよく知る友人からは、「どんなニュータイプ!?」とかわれているくらいだ。

そんな康介が、過去に類を見ない程の嫌な予感を感じていた日。それは、親に言われて、嫌々通っていた近所で評判の学習塾のテストの日だった。

【学校の勉強だけで無く、生きて行く為の総合的な力を育てる】という胡散臭さ満点のキャッチコピーを売りにしている学習塾だが、何せ月謝が安い。

安い上に、怪しげなキャッチコピー通り本当に人格も成長するのが、嘘のような本当の話。

学校一の不良が真面目な好青年に変貌を遂げたり、いじめられっこがタフなナイスガイに変身したり、という例にはことかかない。

まだ塾の歴史が十年と浅いせいで、そんなに噂にはなっていないが、卒業生は財界や政界などで活躍している者も多い。

知る人ぞ知るといふ塾だった。

なので、遠くからわざわざ入塾希望者がやってくるくらい人気がある。

中には、有名な大物の子息も混じっていたりするのだが。

どうやって経営が成り立っているのか不思議なくらい少ない人数しかとらないので、どんなに優秀な人間でも落ちる時は落ちるし、何の取り柄も無い人間がひよっこり受かっていたりもする。

入塾希望者の選定基準がどうなっているのかは、一切明かされていないので、もしかするとただのくじ引きなのかも知れない。

そうでなければ、割といい加減に面接に臨んだ自分が受かった理

由が分からないよな、と康介はひそかに思っていた。

入りたい者達からすれば噴飯物だが、受けるだけでお小遣いアップという条件に釣られて入塾試験を受けた康介にしてみれば、受かってしまった事は災難以外の何ものでも無い。

お陰で、高校生になって初めての夏休みを、見事に塾通いで消費する羽目になったのだから。

地獄のような二週間だったが、その苦行も今日で終わるはずだった。

よりによって、テスト当日に今迄で最大級の悪い予感を覚えた時には、さすがに樂觀的な康介も凹むしかなかった。

もちろん、休むという選択は（お小遣いカットの危険を冒したくないので）あり得ず、恐る恐る家を出たのだった。

何とか塾まで辿り着き、テストの会場になっている特別室、しかも今日だけ名札で指定された席に腰かけた康介は、安堵の息をついた。

どうやら、テストが終わるまで無事でいられそうだと、思ったからだが。

もちろん、そう上手くはいかなかった。



仲間（前書き）

掴みにしっぱいしてるかなー。

## 仲間

### 第二話 仲間

高井有海たかいあるみは、目の前の試験用紙の内容に戸惑っていた。

『同じ班の仲間と相談して、欲しい能力を選んで下さい……？』

視線を上げると、他の五人の班員も、同じように困惑した顔付きをしているのが分かる。

試験に集まった人数は、年齢も学年も様々な24人。

席名札に書いてあった番号で呼ばれ、6人づつ4つの班に分けられた後、今回の試験の内容を説明された。

あまりの荒唐無稽さに、有海は悪い冗談を聞かされている気持ちになった。質問禁止と事前に言い渡されていなかったら、質問攻めにしてしまっただろう。

それから移動を命じられ、班ごとに小部屋に割り振られたのだが、そこには、ディスプレイが置いてあり、簡単に整えられていた可動式の机と椅子が置いてあった。

適当に着席し、机の上に伏せてあった試験用紙の内容を確認して更に混乱が深まったのが、今の状況だ。

「ええと、これってどういうことだと思う？あ、顔は見たことあっても話すのは初めての人が多いから、自己紹介しておくわ。俺、山田寅寿またらかす、同じ班になったんだし気軽に『とら』って呼んでちょ」

有海の斜め向かい側に座っていた少年が、口火を切った。

軽い口調のくせに、名前と見かけは、体育会系。

服装もアーミールック統一で、足元はゴツイブーツ。

一歩間違えればドン引きされかねないファッションセンスだが、その上に乗ってるキリツとした顔で全部をカバーしてお釣りが来ている。

『イケメンは、どんな格好してても、それなりに様になるなあ』

今時珍しく髪も染めず、髪型にも気を遣っていないダメダメさ。なのに細身でバネのある身体付きとバランスが取れているように見えてしまうのも、イケメン効果か。

『それだけじゃない、きちんと絞り込んでいるからこそ、あの身体のラインが出ると見た！むむ、ダンス系とかじゃないな、格闘技系かな、防御の為の脂肪を考慮してないところを見ると……打撃オンリー系か合気系か、どっちは、まだ分からないけど……引き締まった良い筋肉だわあ。腐ふふ』

東の間、筋肉鑑定人モードになる有海。

顔より筋肉という主義の有海は、鑑賞に耐えうる対象に舞い上がり、試験をうっかり忘れかけたが。

「はい」

と、隣に座っていた少女が手を上げたことで、現実を引き戻された。

栗色のふわふわ猫毛をボブカットにした少女のことを、食べちゃいたいくらい可愛いなーと、有海はさつきから思っていた。夏休みだというのに真面目に着こんでいる制服から、有名な私立学校に通っているのが分かる。有海を含む一部の特殊な趣味を持った人間からすれば、まさにプレミアムものだ。

周囲を見回した少女は、皆が、頷くのを見て、外見にぴったりの可愛い声で話し始めた。

「私は鈴木麻世すずきあよって言います。中学二年です。どうして年上の方ばかりの、この班にいるのかわかりませんが、精一杯頑張りますので、よろしくお願いいたします」

ぺこりと頭を下げる麻世。

『ぎゃー、何、そのかわゆさ！お姉さん、鼻血でそう』

有海の好感度は、すでにMAXを超えていた。

内心はあはあしている有海の隣で、麻世が、より有海を萌えさせる可憐な声で話し続ける。

「それで試験のことですけど、さっきの変な説明が本当だと思えませんかから、きつと非現実的な課題で頭の柔らかかさなどを見る試験じゃないでしょうか。『ファンタジーな異世界に送られる』と言ってましたから、そのつもりになって、どんな能力が必要かを考えるということなのかと思います」

『何てしつかりした意見なの……可愛いのに頭もいいなんて、マヨツチは完璧超人！？』

既につけていた「心の渾名」で呼びつつ、当を得た意見を述べる麻世に感心する有海。

「まあ、そんなとこだろうね。お前、中坊のわりには、賢いじゃん。にしても……あーあ、つまんねえ。異世界つてのが、本当なら良か

ったのになぁ」

はぁ、と大げさな溜め息をついて見せた少年に、有海は、眉を寄せた。

『マヨツチを『お前』とか……年下だからって、何、その上から視線。お前こそ見下してるマヨツチに、自己紹介をしない時点で、人間として負けてることに気づけ！しかも異世界が本当だったらとか……リアル中学二年生のマヨツチと違って、お前、中身が中二だな！しかも重症に決まってるよ！お前のあだ名は「厨房」決定だこの野郎』

自分を棚に上げて、内心、少年をこき下ろしまくる有海。

少年の服は、マイナーだがファッションに関心がある者なら注目しているブランドを上手く組み合わせている、かなりセンスが良い。染めてはいないが髪型や小物にもさり気無く気を配っていて、レベルが高い。

それがまた、有海をムカつかせていた。

「なんか、すげえ塾だからって、うちのババアに言われて無理矢理連れてこられてさ。二週間もアウトドア初級編とか、初対面の挨拶の仕方とか、非常時の心構えとか変な授業受けさせられてさ、こんな試験で終わりって、馬鹿みたいじゃ俺……はぁ、まったくやってらんねえ」

口を尖らせるといって、子供じみた仕草をしている少年に、有海は心底呆れ返った。

「気持ちは分かんないでもないけど、そんなことを言っても仕方ないだろ？」

その少年と、山田寅寿を挟んで反対側に座っていた少女が、口を開いた。

背中がぞくつとするようなハスキーな声だった。

綺麗にグラデーションをつけて染めた髪が、山猫を思わせる。

服装もカジュアルパンクといふのが、ドクロマークのシャツに、レザーパンツを合わせて、可愛いというよりは、格好良い系でまとめる。首元のドクロのチョーカーとゴツいリストバンドが良い感じのアクセントだ。

正直、有海の趣味ではない服装だが。

『しなやかで質の良い筋肉……ある意味、女性の筋肉として理想かもー』

違ったところで高評価を下していた。

「アタシは、おおはななえ大場七星。最初に言っておくけど、大バナナって呼んだら殺すから。それ以外なら、どうとでも好きに呼んでいいよ」

「おおばな……」

七星は、ぷつと吹き出しかけた先程の少年を、剣呑な一睨みで黙らせると、吐き出すように言葉を投げつけた。

「自分の名前も言わないやつに笑われる筋合いはない。何か言いたけりゃ、名乗ってからにする。名前は？」

「あ、ああ、俺は、はせはくらかずま長谷一哉……」

ようやく名乗った一哉に向けて、フンと鼻をならした七重は、ぐ

るりと周囲を見回して、再度口を開いた。

「不平不満言っても仕方ない、よく分からない試験なんか、さっさと終わらせるってことでいいんだろ？他に意見あるなら、って、ああ、まだ名前聞いてないのが2人いたな。ちょうどいいや名前と一緒に、アンタから意見を聞かせてくれ」

そう言っつて、正面に座る自分を真っすぐに見つめてきた七星に、有海はふつと笑みを浮かべると、ゆっくり口を開いた。

「わたしは……高井有海……」

「……たかいあるみ、だつて？」

名乗った途端、くわつと目を見開いた七星に、有海はひとつ頷いて見せる。

「そう、そして、マイダディの名前は『テツヤ』……」

「！！……アンタとは親友になれそうなのがする」

「ナナ……」

「アル……」

熱い視線を交わし合う七星と有海。

まさにこの瞬間、二人は、心の友となった。  
しばらく、見つめあった後。

「あ、悪い。続けてくれ」

我に返った七星が、有海の発言を促す。

「うん、そうだね。えっと、試験だけど、私もマヨツチの言うとおりにだと思っな。というか他に思いつかないし、マヨツチの意見も聞いて始めてそうかって思ったくらいだし。マヨツチ天才じゃない？それに可愛いし、仲良くしようねー」

「まよつち……」

思わぬ渾名に呆然とする麻世を、そんな顔も可愛なー、抱きしめたいなー、と思いつながら微笑みかけている有海。  
雰囲気**が**ぼんよりとしかけたところで。

「大体、そんなところか。康介は？」

最初に発言した、有海の好みの筋肉を持つ寅寿という少年が、最後の班員に声をかけた。

今まで熱心に、試験用紙と一緒に置いてあったプリントを読んでいたらしい少年が、その声に顔を上げる。

「あ、僕は、あいだこうすけ藍田康介あいたこうすけって言います。この「トラ」とは、小学生の時からの腐れ縁」

「腐れ縁は、酷いな。俺達は親友だろ親友」

「毎度毎度トラブルに巻き込む奴は、親友なんかじゃない。腐れ縁だろ。まあ、それはともかくとして」

不意に真剣な顔になった康介は、皆をゆっくりと見回し、そして

言った。

「とても信じられないと思うんだけど、よく聞いて欲しい。さっきからの皆の意見聞かせて貰った。普通なら、それで正解だと思うけど。残念ながら……『異世界に飛ばされる』というのは、多分、本当」

『じゃ、邪気眼系キターー。ぎゃー、いちばんマトモぼかったのにー。トラとコウのカップリング楽しんでた私のときどき妄想派純情を返せー！』

「はっ！アンタ何を……」「マジか！！！」

有海が心の中で悲痛な(?)叫び声をあげていた時。

失笑という感じで何かを言いかけた七星を遮って、寅寿が、大声を出した。

かなり、ショックを受けているように見える。

「本当だよ。自分でも信じたくないけどね。最悪、トラだけは信じてくれるだろ?」

「もちろん。康介が言うなら信じるしかないだろ。うわぁ、マジかよ」

『おや、これはこれで、なんか良い感じではないですか、腐ふ?』

有海が、香ばしい台詞の応酬に、ニヤリと笑みを浮かべた時。

「おいおい、何だよ、いきなりこの展開は。テンプレもいいところじゃないの。本当なら嬉しいけどさぁ。何を根拠に、そう言うのか教

えて貰わねえと、さすがに信じられねえよ」

七星にやり込められて凹んでいた一哉が、勢い込んで会話に入ってきた。

『うわ、目がキラキラしてる。コイツ分かりやす過ぎ』

有海が、内心げんなりしていると。

「コイツと同じ意見なのは、ムカつくけど、アタシも理由を知りたい。それでも信じられないかもだけど」

七星が、重ねて言った。

麻世も小さく頷きながら、隣の康介を見上げる。

「あー、何て言やいいんだ？」

皆の不信げな様子に、頭を掻きながら寅寿が康介を見ると。

「そうだね。証明自体は不可能じゃないけど、時間がかかるから、この場では無理だね」

皆の視線を集めた康介が、あっさりと断言した。

「ちょ、そりゃないだろ……」

文句を言いかけた一哉を片手を上げて抑えると、康介は言葉を継いだ。

「こう考えてくれないかな。どっちみち試験で答えは出さないとい

けないだろ。だから、馬鹿にしていいい加減に結論を出すんじゃないで、もし本当に飛ばされるとしたら、と仮定して真剣に話し合うんだ。もし僕の言った事が嘘でも、試験に真剣に取り組む事は無駄にはならないだろ？」

「なるほど……信じなくても良いって事が」

康介を見る目が少し和らいだ七星が頷く。

「そうですね……正直、藍田さんの意見は信じられませんが、最初から試験に真剣に取り組むつもりでしたから」

やはり、年下と思えない内容で麻世が肯定し。

「ナナとマヨッチがそういうなら、私もいいよー」

有海も笑って見せる。

「オーケーオーケー。もともとそっち系は嫌いじゃねえから、望むところじゃん」

相変わらずの一哉が賛成すれば、問題はなく。

「おー、まとまったな。良かった良かった。言っておくけど、康介は本物だからな。後悔したくなかったら、本当にホントにほんとうにマジで話し合おう」

『おー。親友の為に必死になる少年の顔というのは、いいですねー。腐心』

最後にくどいほど念を押す寅寿に、有海が余計な感想を抱いた時  
が、六人がチームとしての第一歩を踏み出した瞬間だった。

## 仲間（後書き）

まあ、ファッション描写については、系統によって作者がよく分らないものは変かもです。  
適当にかっこ良かったり、ワイルドだったり、可愛かったりしてると思っして下さい……。

## 選択

### 第三話 選択

「それじゃ、皆、手元の資料見てみて」

康介が、落ち着いた声で指示を出す。

資料をいちばん先に読み込んでいたことから、流れで康介が仕切り役になったのだが、寅寿としては文句無しの展開だった。

『何かを決める時にやあ、康介が指揮してた方が間違いないしな。こんなトンデモない事になる時に康介と同じ班だったのは、さすが、俺。運良いなあ』

周囲をさり気なくみまわすと、微妙な顔付きをしている者が多いが。

『ま、直ぐに康介の凄さを思い知ることになるからな』

ふふんと、寅寿は心の中で笑っておく。

「かなり微妙な表現が多いのが分かる？まず世界の定義だけど。『ファンタジーな異世界』と一口に言っても、それこそお伽話や伝説、神話みたいな不条理に溢れたものから、魔法も何もない普通の中世のような世界に至るまで、一括りに呼んでるみたいなんだ」

「……えーと、どういふことかなー？」

淡々と説明して行く康介に、有海という少女が、首を傾げて聞き

返した。

何だか知らないが、寅寿のことをやたらと殺気立った眼で見る変な少女だ。

殺気とは違うのかも知れないが、見られると何やら寒気が走って、身の危険を感じるのだから、殺気に分類して間違いはないだろうと思ふ寅寿。

時々、口の端を片方だけキュツと吊り上げニヤリと笑うのが、寅寿にとって駄目押しに気持ち悪い。

『せっかく可愛い顔してんのになあ。恰好もヒラヒラのピラピラで、可愛いのがなあ。殺気さえなければ、好きになったかもしれないになあ』

寅寿の知識では、ヒラヒラのピラピラになってしまっているが、有海のファッションは、所謂ガーリッシュ系で、ほどほどにセンスよくまとめている。

おまけに筋肉に並々ならぬ拘りがある有海は、理想的なバランスを保つ為に運動は欠かさない上に、某デパート美容部員の姉にしっかり仕込まれているので、お肌などの手入れもきちんとい色白でツルツルした卵肌を保っていた。

これで中身さえどうにかすればモテるのに！とは有海の通う女子高の同級生の台詞だが。

有海本人にとっては、男性は掛け算をする対象なので、今まであまり自分と結びつけて考えたことはない。

それはさておき  
閑話休題。

「ここに、小さい字で『選んだ能力であなたと世界の関係が決まります。良く考えて慎重に決定して下さい』と書いてるんだ」

資料を身体の前にかざし、その箇所を指差しながら、康介が有海だけでなく、皆を見渡す。

「そして、こつちには『ほとんどの能力は、その世界の住人が使える能力の中から選ばれています』となってるんだよね。それで、ココからココまでのページには選べる能力の例一覧があるんだけど…… A、B、C、Dの4つに大まかにカテゴリーに分けられてて、仮にテーマを付けるならAが『神話系』、B『魔法系』、C『能力系』、D『技術（技能）系』になると思うんだ。ここまではいいかい？」

寅寿を含め、皆が頷く。

「で、ここに本当に小さい字で『組み合わせが出来ないものもあります』ってなってる。今の事から、僕なりに考えて見たんだけど、結論はこうなる。『一つ、選んだ能力によって行く世界が変わる。二つ、世界の法則に矛盾する組み合わせの能力は発動しない。これは個人の能力限定じゃない。班員同士の組み合わせでも起こると思う。そして最後のが一番きついんだけど、三つ、死亡したらそこで終わり。治癒はあっても蘇生はない。他にも解釈が思いつくかもしれないけど、これ以上、厳しい条件を思いついた時だけ発言してくれるようお願いしたいな。条件を甘くしても良い事ないからね」

まとめ終わった康介が、質問は、と聞くと。

「はい」

麻世マキが即座に手を上げた。

「どござ」

「前の二つは良いとして、最後のは、どこから導き出されたものなのでしょう？それらしい文章は無かったと思うのですが」

「ああ、言葉が足りなかった。ごめん。確かに直接言及している箇所はない。だけど、例として上げられてる能力の一覧表、とくにAの神話系にすら『蘇生』または『不死身』に類する能力が載ってないのは異常だ。神話やお伽話では、『蘇り』『不死身』というキーワードの出現率はかなり高い筈なのに、それが無いということは…高確率で『蘇生』が無い証拠だと思うんだ」

「なるほど、分かりました」

「こくんと頷く麻世が康介を見る顔から、いくらか険が取れたのを寅寿は見逃さなかった。

「ただ……隠されている可能性はあるかも知れないね」

「隠されてるって、何でだ？もしかして見つけたら、展開が有利になるボーナススキルってヤツ!？」

鼻息を荒くして発言したのは、一哉<sup>か</sup>だ。

期待に満ちた一哉の視線に、だが康介は首を振る。

「さつきも言ったとおり、Aのカテゴリーには、天変地異や確率操作系まであるのに、『不死身』系がないのが不自然で明らかに意図を感じるけど、隠されてるとしても相応の理由がある筈だし、有利かどうかは分からない。もしかすると、それを望んだら、その時点で試験失格なのかもしれないね」

「ちっ、トラップの可能性もあるって事かよ。本当にそうだとしたら、この出題者、かなり性格悪いいな」

冷静な康介の意見に、忌々し気に拳をもつ片方の掌に叩きつける一哉。

「ふん、電波野郎の割には、筋道立ってるじゃないか。仕方ない、本当に電波かどうかは別にして、アンタに方針任せた方が良さそうだな。皆はどうだい？」

今までの遣り取りを黙って見ていた七星<sup>ななえ</sup>が、ぐるりと皆を見渡した。

「ナナとマヨッチがいいなら、アタシは良いよー」

軽く有海が心じたのを皮切りに、残りの者も口々に肯定した。それに対して、康介は軽く頭を下げて見せる。

「受け入れてくれて有難う。それじゃ早速、決めて行こうか。時間は、たっぷりあるように見えるけど、真剣に話し合うならぎりぎりだと思っからね。ええと、試験問題は仲間と相談して欲しい能力を選ぶということだけど……ここは、それを逆手に取りたい。選んだ能力で世界が決まるということを前提とすれば、どんな世界に行きたいかをまず決めてしまっ。それから、その世界に矛盾のないと思う能力を選べば、行き先をある程度操作できると思うんだ」

「なるほど、なるほど、コウも頭良いんだね。これは楽出来ていいかも」

有海が、コクコクと頷いた。何時の間にか、康介のことを「コウ」と愛称で呼んでいる事に、寅寿は呆気に取られた。

『親友の俺でさえ、「コウ」なんて気安く、呼ばせてもらえんのに……コイツ侮れん』

「ちなみに、私はせっかく行くんだから魔法を使って見たいです！空を飛んでみたいです！猫耳娘さんとか希望です！！」

「お、俺は最強がいい！神様クラスの能力が欲しい！」

有海の主張に、お調子者の一哉も慌ててまくし立ててきた。

早い者勝ちと言うわけでもないが、欲しい能力が被るようなら先に希望を述べた方が有利になることがあるかも知れないな、と判断した寅寿も続けて手を上げた。

「俺は、殴り合い強化がいいかな。男は拳だよな」

「いや、ちよつと待って。だから、どんな世界に行きたいかが先だよ。今のところ、ちゃんとリクエストしてるのは、高井さんだけじゃないか。トラも釣られてどうするんだ」

「あ……」

『アホに釣られてしまった…』

がつくりと頂垂れる寅寿を、鼻で笑って七星が口を開いた。

「心友のアルミには悪いが、安全を考えるなら、ファンタジーとは

言っても、魔法とかが無いこっちの世界の中世レベルあたりのが良くないか？」

「……そうですね。やっぱり安全策を取ったほうが……魔女っ子とが無理ですね……」

七星の意見に、少々がっかりした様子の麻世が、力無く同意する。

「かあっ！何言ってるやがる。魔法や能力バンバン使って、最強目指さなきゃ行く意味がねえだろ！！これだから、女は嫌なんだよつ。なあ、トラもコースケも分かるよな！？」

『く……面白そうだが、ここで頷いたら、コイツと同レベルになるのか！？』

一哉に同意を求められた寅寿が、じつとりと汗をかきながら、康介に視線を走らせると。

「最強は、やめた方がいいね」

「えーーーーー！！何だよ！」

不満と言つ文字を顔中に貼り付けた一哉に、康介は苦笑しながら、理由を述べる。

「忘れてるようだけど、ここにある能力は、僕達だけが使えるんじゃないんだ。飛ばされた先にも使える存在がいることになるんだよ。つまり神話系の能力を選んだら、神様と戦うハメになりかねない。下手すると、あちらは、普通に不死身だったり、生き返ったりするかも知れないよ。何せ神様だからね。絶対神なら勝負にもならない

し、多神教や邪神世界でも、まず勝てないと思う」

「ちよつ、あつち側がチートしてる世界かよ。そりゃ、遠慮する。ヤバすぎだったの」

「そつかー。マヨツチとナナとコウが反対するなら、残念だけど魔法は諦めることにする……」

しょんぼりとした有海に、康介は軽く首を横に振った。

「いや、カテゴリーBにあるものは問題ないと言つか、魔法なんかは積極的に選ぶべきだと思う。これは試験だから、課題通りどうにかして社会的に成功しないといけないんだけど、普通の中世レベルの世界にしちゃうと、ただの学生の僕らでは生き残ることすら難しくなりそうだよ」

「だが、魔法が当たり前の世界だと、物理的な手段を防ぐのと違って、何を警戒して良いかわからないうちに殺されたりしないか？」

康介は、七星の懸念に頷いて見せた。

「確かにそれはあると思う。でも、考えてみて。中世って物語の中では綺麗に描かれてるけど、下手すると下水処理が悪くて衛生状態がかなり酷かったり、病院も無かったり、治安もあまり良く無いのが普通だと思うんだ。そんなとこに、こっちの世界での「常識の範囲で強い」人が行って、生き残れると思うかい？」

「なるほど、格闘技の世界チャンピオンでも、武器を持った複数のヤツらに囲まれたら危ないってことか」

「そう言うこと。だから、狙うのは魔法や能力の使い手が特権階級な世界かな。あんまりレア過ぎて狩られたりするのはいまずいけど、そこらへんは可能な限り調整する。と言っても、ある程度運任せになるのが悩むところだよな」

「そんな調整が可能なんでしょうか……？」

「ええと、鈴木さんは、魔法を誰でも使える世界と、限られた人だけが使える世界の違いはなんだと思う？皆でそれを考えて、と思ってるんだ」

「そうですね……」

康介の問いに、フワフワ髪の毛を傾けて考え込む麻世に寅寿は。

『可愛いなあ。機会があったら頭撫でてみたいなあ』

ポーツと考えていた。犬猫や小動物が割と好きな寅寿にとって、麻世は目一杯、愛護心をそそる相手だった。

『あつちの世界に行ったら、護つてやんないとなあ』

寅寿が、勝手にそんなことまで考えているうちに。

考え込んでいた麻世が口を開いた。

「魔法を使うことが特権的なら身分制度には大きな違いが出ますけど、これは世界を選ぶ手段として対応する能力が思い付きませんし……やっぱり、日常の暮らしに関わることでしょうか。講習で火を付けるやり方を習った時、かなり苦労したんですけど、魔法が使えるれば苦労しなくてもすむでしょうし……」

自信なさげな口調の麻世だったが。

「うん。鈴木さんと僕は同じ結論だ。魔法を使えない人と使える人が程よく混じった世界には、科学と魔法が両立していると考えれば良いと、僕も思う」

康介は大きく頷き、隣にいる麻世に、ニコニコと笑いかけた。

「……………あ、はい」

いきなり親し気な笑顔を向けられた麻世は、少し戸惑った風だ。

康介に妹が3人もいることを知っている寅寿は、麻世に対する康介の態度にも納得が行くが。

「こ、康介！普段、感情を抑えてるお前が、それはマズイだろう……誤解を受けてるかも知れんぞー」

恐る恐る周囲を見回すと女性陣の視線に、若干警戒の色が混じっているのが分かった。

電波野郎と思われていた最初の頃に近いかも知れない。

「さすが、フラグクラッシャー康介。頭の良さとかでかなり好感度アップしてたはずなのになあ」

寅寿が内心で、残念な友達を残念がっていると。

康介は何も気付かず、また話し始める。

「具体的にだけど、例えば、Bカテゴリーから飛行魔法、Cカテゴリーから乗馬を同時に選んだとしたら、『魔法を使う人は飛んで、

使わない人は馬で移動する世界』か、『魔法を使う人でも普段は馬で移動する世界』になると思うんだ。同じような対比の能力なら、料理関係とか、鍛冶関係とか、建設関係、医療関係なんかもそうかも。鈴木さんはどう思う？」

「……そ、その通りだと思います」

ロリコン疑惑を駄目押しするように、麻世に意見を求めてしまった康介から、じりつと心持ち身体を離しながら、それでも冷静に麻世は頷いて見せた。

「つうことは、何だよ。魔法とか能力選ぶのは良いけど、あんまり強くなって、日常に使えるくらいのの選べってことか？」

KY一哉が、KYにだけ出来るタイミングで救いの手を差し伸べた。

少々、おかしいことになりかけていた雰囲気、変わる。

「いや、神様が出てこない程度で出来るだけ強い魔法や能力を選んで欲しい。奥の手というヤツだね。魔法の強さが特権のバロメータになってることもありそうだし。成り上がる為には、そのくらいのアドバンテージは持ってないと」

「マジか！ やったぜえ。そうこなくちゃ、面白くねえ。何を選ぶとするかな」

ウキウキと能力の一覧表をながめ出した一哉から始めて、皆を見回しながら、康介が言う。

「とりあえず、今までの話し合いを参考にして、各自欲しい能力を

選ぶことにしよう。後で組み合わせが矛盾してないかどうか、皆でチェックし合って調整って言うことで。能力はダブってても構わない。整合さえとれてればね。今の自分の特技に付加価値をつける方向で能力を取るのも良いと思う」

康介の意見に頷いた皆が能力表を真剣に見始めるのを横目に、寅寿は康介に尋ねる。

「ところで康介、異世界に飛ばされて、それきり帰って来られないって危険性は無いのか？」

「あ、それは大丈夫だと思う。何故か帰ってこられないという予感はない。試験の前にあった説明でも安全性については、くどい程保証してたし。嘘って言う感じはしなかったから」

あっさりと頷く康介に、寅寿はふうつと安堵の息をもらした。

「悪いな。康介が逃げようと言わないから大丈夫だとは思ってたんだけどな。はつきり言ってもらえると、安心するわ」

「それだけが、取り柄だからね。さ、僕達もさっさと選んじやおう」

「おう」

寅寿は、大きく頷き、能力表を見始めた。

『あ、そついや……つと、まあ、後でいいか。何があっても康介と一緒にいれば、そんなに悪いことにもならないだろうしな。判断に迷った時は、その都度聞けばいいし、楽なもんさ』

と、心の中でだけ呟いた寅寿は、後に、ちゃんとその場で聞いておけば良かったと悔やむことになった。

## 選択（後書き）

なかなか異世界へ旅立ちません……が、次は必ず！。

離散（前書き）

ついに異世界に。

## 離散

### 第四話 離散

明るい陽射しが差し込む林の中。

麻世まよは、周囲を見回して溜息をついた。

『藍田あいださんは、本物でしたか。疑って悪いことをしました』

パツと見では、ほとんど変わらないように見えても、樹木や草花が麻世の知っているものとは少し違う。

強いて言えば、去年家族で行ったスコットランドの林に似ているが、どちらにしても日本では無いと麻世は確信した。

『異世界に飛ばされるのは藍田さんに言われていたので、まさかと思いつつも覚悟してましたけど……離れ離れにされるとは思いませんでした……どうすれば良いのでしょうか』

気付くと、麻世一人だけが、ここに立っていた。

6人ずつという班分けをされたので、当然一緒に行動するものと皆思い込んでいたのだが、そうでは無かったらしかった。

『もしかしたら、同じ世界にはいないということも……』

最悪のことを想像した麻世は、ぶるつと身を震わせた。

年の割には、自己制御セルフコントロールにだけ、頭も回る少女だが、それだけに今の状況がかなりマズイと理解できてしまい憂鬱になっていた。

『……まずは、自分の服装と荷物のチェックでしょうか』

麻世は落ち込みかけた自分に活を入れ、無理矢理、短期的な作業に頭を切り替える。

全身を映す鏡などは無いので、一生懸命下を向いたり身をよじったりして、自分の服装を確かめてみると、通気性と保温性を兼ね備えた最新素材のアウトドアアルックという指定の通り、それらしい服装になっているようだ。

『想像していた通りにちょっと可愛いデザインになっているのが凄いです。でも……自分では着替えた覚えが無いのに服装が変わっているのは、少し気持ち悪い気がします』

もと着ていた制服はどうなったのでしょうかと考えながらも次にいつの間にか背負っていたリュックを下ろして開けて見てみる。すると中には皆で話し合っただけの道具類のうち麻世の分担当とされた細々とした物と身の回りの品がちゃんと入っていた。

『一応、最低限の物は自分でという取り決めをしておいて良かったです。着替えとか無いまま旅をする事になっていたら、耐えられませんでした』

躰が行き届いている分、麻世には少し潔癖性なところがある。それも衛生観念が中世レベルの世界で暮らして行くには、少々不安要素になりそうなほどだ。

『それから、あ、そうです。確かめておかないと……ええと』

目の前に両手で皿を作った麻世は、小さく口を開き。

「水よ在れ」

一言囁いた。

すると、何も無い空中から水が流れ出、麻世が差し出した両手の窪みに溜まった。

『！！ 魔法が使えました……間違いなく異世界なんですね……ここは』

恐る恐る手のひらに溜まった水に顔を近づけ、口に含む麻世。

『あ、美味しい』

魔法で出した水は、澄んだ清水の味がした。意外と喉が乾いていたことに気付いた麻世は、コクコクと残りの水を一気に飲み干して、一息ついた。

『これで水の心配もなくなった……です……ね』

伏せていた顔を上げ、もう一度ゆっくりと辺りを見回した麻世は、柔らかな木漏れ日が周囲を照らし幻想的な雰囲気を作り上げている林の中で、不意に途方に暮れた表情を浮かべた。

『……人のいる場所を探しに行くか、安全な場所を見つけるか、どちらが良いのでしょうか』

遭難した時は、その場を動かない方が良いとは言われているが、それも探してくれる人がいればの話だ。もし、全員がバラバラにされ遠い場所に飛ばされている場合、動かなければ、合流まで時間がかかり過ぎ、それまで無事に過ごせるかどうか分からない。

『皆さんと合流するまでか、出来なくても一人で頑張らないとです』

麻世は、ぐつと力を入れ小さな手で拳を作る。

『いろいろ能力も貰いましたし、できる筈です。出来なきゃいけないです』

唇を軽く噛みしめ、歩き出そうとした麻世。

だが、足は動こうとしなかった。

『だ、ダメです。が、頑張らないと……いけません』

ギョツと両の手を握りしめて肩に力を入れ、なんとか進もうとする麻世だったが、一歩が踏み出せないまま、徐々に顔が下を向きはじめ、ついには完全に俯いてしまった。

「が、がんばらな……い……と……つく、……ひつく」

麻世の肩が震え、ポタポタと雫が下草の上に落ちはじめた時。

サクサクと下草を踏みしめる音が麻世の背後から聞こえて来た。

「おー、鈴木さん発見！割と近くて助かった」

「ふえ……」

聴き覚えのある声に、呆然と麻世が後ろを振り向くと。

「早いうちに会えて、良かった……って」

そこにいたのは、藍田康介<sup>あいたこうすけ</sup>だった。

ニコニコとしていた顔が、すっと真面目なものになると、足早に近寄って来て、ギュツと麻世を抱き寄せる。

「遅かったか、ごめんね」

そのまま麻世の頭を優しく撫でながら、康介が囁いた。身長差で、ちょうど康介の胸の位置に麻世の頭がくる。

「これでも急いで探して来たんだけど。心細い思いさせちゃったか、ごめん」

「……っく、ひ、ひとりで、ひっく……どうしよう……っく……って」

「もう大丈夫、もう心配ないから」

.....

ポンポンと背中を優しく叩いてくれる康介にしがみ付いて、しばらく泣いていた麻世だったが、徐々に落ち着いて来た。

「……っは、んく……はあ」

ようやく感情の爆発が収まった麻世の様子を察知したのか、大丈夫大丈夫と言い続けながら、背中を優しく叩いてくれていた康介が、軽く身体を離すと、ゴソゴソと懐を探って取り出した布で優しく麻世の顔を拭う。

泣き疲れもあって、ボーッとしていた麻世はしばらくされるがままになっていた。

「よし、ほらこれで綺麗になった。うんうん、可愛い可愛い」

『え？あれ？』

麻世がふと我に返ると、康介が至近距離でニコニコと自分を見つめていた。

「……い、い、い」

「い？」

「イヤーーーー！！！！！！！！！！」

康介に、抱き付いて泣いた上に、涙でぐちよぐちよの顔まで見られたと気付いた麻世は、最大級の悲鳴を上げてその場に蹲った。

「つつ！み、耳が……」

至近距離で大音量を浴びせられた康介もまた、耳を押えて蹲るのだった。

.....

「本当に申し訳ありませんでした」

「いやいや、こちらこそレディに失礼なことを。つい妹と同じ扱いをしてしまっごめんね」

あれから十数分後、麻世と康介はお互いに頭を下げまくっていた。麻世が落ち着くまでと、これからの打ち合わせもしなければ、と  
のことで軽く休憩をとることにしたのだ。

適当な岩の上に腰かけ、麻世が魔法でお湯を出して、康介が持っていた粉末レモンティーを淹れた。

猫舌の麻世は、冷ましていた紅茶を一口飲んでから、口を開いた。

「妹さんがいらっしやるんですか？」

「そうなんだ。小三と小五に、鈴木さんと同じ中二。だからかな、  
つい対応が同じになってしまっ……」

申し訳なさそうな康介に、麻世はくすつと笑った。

『最初から妙に親し気でしたから、もしかして少女に必要以上に興味のある方なのかと思ってましたけど、わたしと妹さんを重ねていただけでしたか』

「兄妹たくさんで羨ましいです。わたし、一人っ子なので」

「そうか、それは寂しいかもしれないね」

「特に藍田さんみたいな優しいお兄さんが欲しかったです」

「優しいかな。妹達には、もっと女の子に気を使えって、いつも怒られてばかりだけだ」

怒られてる康介が、容易に想像出来て麻世はクスクスと声を上げて笑った。

「鈴木さんが、元気になって良かったよ」

自分が笑われているのに、麻世の方を心配してくれる康介がニッコリと笑っている。

「さ、さっきの事は、忘れる約束じゃないですか!」

「あ、ごめんごめん」

「藍田さんは意地悪です」

「……………ごめんね、鈴木さん」

本当にすまなさそうに謝る康介に麻世は、ふふつと笑って言う。

「わたしのことは、麻世と呼んで下さい」

「名前で呼ぶって言うこと?」

「はい。さんも、ちゃんもいらないます。呼び捨てにして下さい。その代わり、わたしも、『コウさん』と呼んで良いですか?」

「それは、構わないけど、呼び捨てと言うのは……………」

「いいんです。わたしが良いって言うてるんですから」

「そうか……………うん、分った。頑張ってみるよ」

真剣な顔をして頷く康介がおかしくて、麻世はもう一度、ふふと小さく笑った。

- - - - -

麻世は、空中で身体をくるつと反転させた。

最初に見た方向には、森と丘が連なり、やがて山へと繋がる自然に溢れた景色しかなかったが、反対側には平野が広がり、一応街道と呼べるようなものと、その先に町がみえていた。

『あまり大きくは無いですけど、宿くらいはあるのでしょうか』

麻世が選んだ能力の一つが、飛行魔法だった。

本当は、麻世は箒に乗るか、日傘を差すというオーソドックスなスタイルで飛びたかったのだが、汎用性が損なわれるとの康介の意見で、身一つで飛べる能力を選ぶことになった。

身一つで飛ぶと言っても、自分の触れた物を一緒に持ち上げられる能力にしておけば、見かけ上、箒や傘で飛んでるように出来るという康介の提案に、麻世が納得した事も大きかったが。

『それでも空を飛ぶのは思ってた以上に楽しいです！』

周囲の地形の確認と言う目的を果して少し余裕が出た麻世は、青空の中、両手を広げてクルクルと回って見た。

誰も見ていないということもあって、麻世は顔中に笑みを浮かべ、今にも歌い出しそうな表情をしている。

普段は、少し大人びた印象のある麻世だが、そんな表情をすると、年相応に見える。

『もうちょっと練習して人一人抱えて飛べるようになったら、この景色、コウさんにも見せて上げたいです……あ、コウさんと言えば、

すっかりお待たせしてますか』

麻世は最後にもう一度だけ町の方向と地形を確認すると、康介の待つ林の中へ、ゆっくりと降りて行った。

- - - - -

下に降りると、それまで心配気になっていた康介が、ニッコリと笑みを浮かべて出迎えてくれて、麻世は少し嬉しくなった。

「麻世、お帰り。調査ご苦労様」

自分をちゃんと呼び捨てにしてくれる康介に笑顔を返した麻世は、まだ慣れないので用心しながら着地した後、方向を忘れないうちに報告する事にした。

「こちらの方向に少し行ったあたりに舗装されていない道があつて、その先に小さい町がありました。反対側は、森が続いて丘と山になつてました……とても、綺麗でした」

報告の最後に、躊躇ってから付けたした麻世の言葉に、康介は大きな笑みで応えて頭を撫でて来た。

「綺麗だったか……良かったね」

「……はい」

『不思議……コウさんといると、何だか甘えっ子になってしまいきうです』

憧れていた兄というのは、こんなものなのかと麻世は、素直に頭を撫でられながら思っていた。

「それにしても街道があつて、ほっとしたよ。これで魔法と科学が程よく混じった世界に來られた可能性が高くなつたね」

撫でるのをやめた康介が腕組みしながら言った。

その手を、名残惜しそうに一瞬目で追つた麻世も、こくんと頷く。「飛行魔法や空間転移魔法を使える人が限られた世界だから、道があるという事ですか」

「そうそう。後は町で建物や売つてる品物なんかを觀察すれば、かなりのことが分かるはず。人については……言葉が通じるかどうか問題だけど、一応、大丈夫と塾長は言つてたからね」

「……塾長さんですか……信用できるのでしょうか」

出発する直前、こちらに向かつて「頑張つて来てねー」と能天気なヘラヘラと笑つていた塾長の顔を思い出して、不安になる麻世。

「うーん、すつごく怪しい人なのには間違いないけど。でも、魔法も使えたし、僕が麻世を簡単に見つけられたのも『欲するものを探し出せる力』なんて抽象的な能力が実現しているお陰だし。大丈夫だとは思つ」

「……コウさんが、そう言つのなら大丈夫そうですね」

今では、康介をすっかり信用している麻世は、とりあえず不安を

忘れる事にした。

「にしても、小さい町って言うのは、少し困ったことになるかも知れないな」

「どう言うことでしょうか？」

「いや。出来るなら、最初は小さな村か、町は町でも大きな『街』の方がうまく行くかなと思っていただけ。ほら、僕達は、お金を持っていないからね」

「ああ、村なら、交渉次第でお金を使わずに済むかも知れないし、街なら準備しておいた宝石などを換金できたのということですか」

「うん。服装と貨幣は分からないからって、服は僕らの世界のアウトドアの服装にしたし、選べる装備品一覧の中から砂金と宝石を適当に持って来て見たけど……コレだって価値がイマイチ分からないしね。もしかしたら、ここでは魔法で簡単に作り出せたりする可能性だってあるかも」

「だから、こんな怪しいお土産品みたいなのを、持って来たんですか」

自分に渡されていた品物を覗き込む麻世。

あまり高張らないからと、担当する事になった物だが、内部にレーザーで3D彫刻したクリスタルやオルゴールなどが適当に詰め込まれている。

「ほとんどヤケクソさ。物の価値は需要と供給のバランスで決まるから、何が価値あるかって言うのは実際に見て見るまで予想もつか

ないのが痛いよね。特に魔法がある世界なんて……」

「最初は、世界に慣れる事からスタートしないのですか……」

「そういう事だね。まあ、こうしてても仕方ないから、町に向かうか！他の皆も探さないといけないしね。合流さえ出来れば、何が起こっても大体は対処できる筈……まあ、他はかなり遠そうだけだね」

康介が苦笑いをしながら言った。

他の班員は、かなり遠くに飛ばされた様だというのは、康介の探知能力で判明していた。

康介が狙った通りに、能力で「欲しい物」の大体の方向と距離が分かるらしい。

「……他の皆さんは大丈夫でしょうか」

「麻世が上に行ってる間に、もう一回集中して探って見たんだけど、どうやら僕達みたいに二人づつ近くに飛ばされているみたいだから何とかなるんじゃないかな」

「そうですね。二人なら何とかありますね」

こくと頷いた麻世は、康介を見上げると、

『……飛ばされたのが、コウさんの近くで良かったです』

心の中だけで呟き、微笑んだ。

## 離散（後書き）

異世界ものなのに異世界に來ないと始まらないので、急いで投稿して見ました。

英雄志願（前書き）

残酷な描写が少しあります。

## 英雄志願

### 第五話 英雄志願

森の間を抜けて進み、そろそろ山道に入ろうかというあたりで、突如山賊が襲いかかって来た。

数人の商人同士で隊商を組み、護衛もそれなりに雇っていたが、運の悪いことに賊の中に腕の立つ者がいたらしく、護衛集団のリーダーが一刀のもとに切り捨てられると、他の護衛達は、ほとんど逃げ出してしまった。

護衛として雇われるのは、多くが傭兵崩れの者だ。中には、口ばかりで腕の方はさっぱりというハツタリ護衛集団もあるので、注意が必要というのは良く知られている。

護衛を紹介してくれたたり質を保証してくれる組織や機関が存在しない為、選ぶのは雇う側の眼力次第。

酷い時には護衛がそのまま山賊に早変わりすることもあるので、細心の注意が必要だ。

もちろん一番良いのは、自分で固定の護衛集団を持つ事だが、国で一、二を争う様な大店の商人ならともかく、旅商人や普通一般の商人には、懐にそんな余裕はない。

普段は怯えながらも単独で護衛もつけずに旅をし、どうしても必要な時だけ、複数で隊商を組むなどして護衛を頼むのが、一般的だった。

どうしても必要な時。

例えば、山賊が出るといふ噂が流れているが、どうしても隣町に

行かないといけない様な時だ。

ベテランの商人達が古株で顔なじみの護衛集団を頼んで先に出発してしまっただのが、そもその始まり。

顔なじみの護衛集団は、街道を行ったり来たりしているので、待ってれば、数日で帰って来ただろうが、それを待っていては先に行ったベテランの商人達に致命的な遅れを取り、儲けを全部持って行かれてしまいかも知れない。

焦った若手の商人達を選んだのが、他の護衛集団を頼むという手段だった。

吟味して選んだ護衛達だったのだが、それでも失敗した。

商人達は知らなかったが、この護衛達は決して、前述のハッター集団ではなかった。

ただ、傭兵を引退したばかりのリーダーが、腕に覚えのある者達を集めて結成したばかりの新米集団だっただけだ。

リーダーが生きていけば、それなりに戦えただろうが、肝心のリーダーが居なくなってしまったので、無様を晒す事になったというのが実際のところだ。

「うう、怖いよお」

「くそつ、何て事だ」

「あなた、せめて子供達だけでも」

「……このまま、殺されるなんて嫌」

この商隊の中に、一台だけ特に目立つ馬車があった。

他の馬車が、幌を張っていても全部荷馬車なのに比べ、その馬車

は、箱馬車と呼ばれるタイプ。

裕福な旅人が街道を行き来するのに使う天蓋付きで、六人以上は乗れる大きめのしつかりとした造りの馬車だった。

その馬車に乗っていたのは、最近運良く事業に成功をおさめた商人と、その家族だった。

商人の名前は、イスフ・カンジ・ベスニ。

臨終の床にあり、最後に孫の顔が見たいというイスフの父（隣町在住）の元へ、向かっていた途中。

山賊騒ぎで足止めをくらいイスフ一家が焦っていたところを、運良く護衛を雇って出発するという商隊に加えてもらったのだ。

その時、イスフは降って湧いた幸運に多いに喜んだが、今になって見れば、不幸の始まりだったということか。

「ああ、誰か助けてくれ……」

イスフは、自分を見つめる家族達から顔を背けて、絶望の声を漏らした。

山賊と言っても、千差万別。

一定の通行料を払えば山路の案内までしてくれたり、荷物は奪うが命までは取らないといった交渉の余地が残る者達もいれば、全員殺すか奴隷にするといった者達もいる。

最悪な事に、襲って来た山賊達は後者で、その性は極悪非道。

今まで、生きて帰って来た者は、何かの弾みで気付かれなかったり、自分達のことを宣伝させる為にわざと見逃されたりした、ごく少数しかいないという噂だった。

ただ殺されるだけならまだ幸せと言えよう。

イスフの大切な家族。気だての良い器量良しな妻と、町でも評判

の美人な娘、目の中に入れても痛くないほど可愛い息子。

その三人に襲いかかる不幸な出来事を考え、いつそこで自分の手で殺した方が良いかも知れない、などという馬鹿な考えを、真剣にイスフが考慮し始めた時だった。

「その山賊共、全員ぶつ飛ばしてやるから、覚悟しろー！」

信じられない台詞が、イスフの耳に聞こえて来た。

同時に、バリバリと雷鳴が響き渡る。

「ま、魔法使いだっ！！！」

「何でこんなところに！？」

「くそっ、退くぞー！！」

「逃げ遅れるな！」

今まで、笑い声さえ立てながら護衛達を圧倒していた山賊達が、一斉に浮き足立って逃げ出し始めた。

「あ、こら逃げるんじゃないやねえ！悪党どもがー！」

先程と同じ甲高い声が馬車のそばを通り抜けて、賊を追って行く気配がする。

周囲に取り残された商人達と、護衛集団の生き残りが、キョトンとした顔で点在しているが、馬車の中にいるイスフには見えていなかった。

「た、助かった……のか？」

イスフが、呆然として呟いた時。

「中の人、無事か？怪我していないか？」

女性のものだが、低く少し掠れたような声と共に、扉がノックされた。

「あ、ああ。無事だ……怪我している者もない」

「そうか、それは良かった……落ち着いたら出て来なよ。もう安心だから」

扉の外の声の主はそう言うと、踵を返したのだろう。

ざりつという土を蹴る音と共に馬車から離れて行く気配をイスフは感じた。

恐る恐る馬車の窓にかかったカーテンの隙間から、イスフがこっそり覗いてみると。

金髪だが、綺麗に色の濃さが段階を追って分かれている珍しい髪色をした人物の後ろ姿が見えた。

こちら辺りでは見かけない珍妙な服を着て、これまた見慣れない細身の剣を腰に差している。

流れの傭兵か、貴族の私兵、もしくは腕の立つ遠国からの旅人のどれかだろうと、イスフは今までの経験から当たりをつけた。

その人物は、倒れたり血を流したりしている者達に話しかけ、無事確かめているようだった。

横顔を見ると、意外にも幼い顔立ちをしていたのにイスフは驚い

たが。

言動から考えるに、見た目通りという事もないだろうと、すぐに思い返した。

この大陸の遙か西にいくつかの島があり、そこに住んでいる少数民族が、大人になっても幼い顔立ちのままなのだと言われ、商人が言っていたのを、イスフは思い出したのだ。王都の趣味人の間では最近、彼らを奴隷や侍女として召し抱えるのも流行っているらしいとも。

「とりあえず、礼を言わなければならないか。お前達は、ここで待っていてなさい。少し行って来る」

「お父様、どうなさるのですか？」

自分を見上げて尋ねてくる娘に、イスフは手に握っていた短剣を懐に戻しながら答える。

「どうやら、助かったようだ。賊は逃げて行った。追い払ってくれた方に礼と、怪我をしている者もいるらしいから、他の皆の様子も見てこようと思う」

「それでしたら、私も一緒に行きます。何かお手伝いできる事がある筈です」

「……スファミナ。安全と言っても、まだ完全に落ち着いたわけではない。お前に付ける護衛もないのだ。ここで大人しく待っていてなさい」

イスフは、不服そうに自分を見返す愛娘に溜息をついた。

スファミナ・アリヌ・ベスニは、今年で15歳になるが、お淑や

かな外見とは裏腹に気が強い。幼い頃は、棒切れを持って駆け回ってばかりいて、口癖は「女騎士になるの！」だった。

騎士になるには、才能が足りないようだと自分で気づいてからは、大人しく嫁入りの為の作法やら何やらを学んでいて、すっかり年頃の娘らしくなつたと、イスフは安心していたのだが。

人の性根は、そう変わらないものであるらしい。

「でも……」

「いいから、お前はここにいなさい。これは、命令だ。いいね」

「……はい」

不承不承と言う感じで頷くスファミナをジロリと睨んだイスフは、次に助かったという安堵のあまり呆けている愛妻に苦笑し、その妻にしがみ付いてまだ震えている幼い息子の頭を一つなでると、馬車の扉を開けた。

-----

隊商の周辺は、ひどい有様だった。

切り捨てられた護衛達の死体が、まだ片付けられておらず、むっとする血臭と、腹を抉られた者（ただ単に漏らした者もいるだろうが）の糞尿の臭いが、混然として立ち込めている。

「……………」

思わず吐きそうになったイスフだが、胃から込み上げて来た物をぐっと飲み下し、一瞬だけ顔をしかめるに止めた。

そのまま周囲を見回したイスフは、軽傷なのに腰を下ろして動こうとしない何人かの護衛に侮蔑の視線を投げたが、荷馬車の陰に見つけた女戦士の姿に、眉間の皺を解いた。

礼を言う為に近寄ろうとしたイスフは、地面に横たわった怪我人の上に屈み込んだ女戦士が翳した手の平から漏れ出す光に気付いて、ギョツとして足を止めた。

『ま、まさか！？』

イスフが驚いている間に、離れた位置から見ても酷かった傷が塞がって行くのが分かる。

『ち、治癒魔法……しかも上級か』

初級の治癒魔法は、魔法を使える者達の間では、そんなに珍しいものでも無い。だが、重傷の怪我人を一瞬で治せる上級レベルともなれば、神官か貴族の中でも特に力の強い一部の者が使えるだけだ。

『一体、彼女は……素性が分からないうちは、下手な対応はまずいな』

イスフは、考えていたより、対応のレベルを数段階上げる事にした。

「少々、よろしいですか」

ん、と顔を上げて自分を見る女戦士に、イスフは自分の額に両手を当て、それから胸に両手を当てるといふ礼をした。これを跪いて

行えば最上級の礼になり、立つて行つ略式でも、かなりの礼を尽くしたことになるものだった。

「私は商人のイスフ・カンジ・ベスニと申します。この度は我々を助けて頂き有難うございました。深く感謝いたします」

「いや、助けるつて決めたのは、もう一人の方。もうすぐ帰つて来ると思うから、礼はそつちに言つて」

「いえいえ、治癒魔法をかけて頂けただけで、感謝するには十分な理由です。仲間と相談しまして、お働きに見合つた御礼はさせて頂きます」

万が一にも失礼の無いようにと、イスフが神経を使った受け答えをしているのを理解したのか、女戦士は少し考え込むような顔をした後、立ち上がつて、イスフに顔を向けた。

「……もしかして、治癒魔法つて珍しかったりする？」

「……重傷者を瞬時に回復させる様な上級になりますと、使い手はかなり限られますな」

質問に驚いたイスフだが、用心深く、丁寧な調子を保つたまま答える。

「あー、そうなんだ」

少し顔をしかめた女戦士だが、すぐに表情を元に戻した。

「私達は、遠くから来たんだけど、いろいろあつて仲間とはぐれて、

今、探してる最中。ここら辺の事に詳しく無いので、御礼っていうなら情報を貰えるのが嬉しい」

「情報……でございますか」

「ああ。それこそ、日常生活のちょっとした事から、国政の噂話まで。その代わり、生きていて手に負える人は治療するし、そちらの行き先まで護衛もする。どうだい？」

「護衛については、本来なら仲間と相談する事柄ですが……その必要もないでしょう。ぜひお願いいたします。情報はもちろん、御礼は別に考えさせて頂きます」

女戦士からの申し出は、願っても無い事だった。

まとめ役が居なくなった護衛集団は、かなりの確率で厄介事を引き起こす事が目に見えていたからだ。

「それでは、もうお一方が戻られましたら、契約を交わさせてもらいます。それまで貴女様には治療をお願いできればと思いますが、いかがでしょうか？」

「ああ、それでいいよ」

イスフの提案に、女戦士が頷いた時だった。

「な、何をするんですかつ?!」

背後から、突然、女性の叫び声が聞こえて来た。

『スファミナ!?!』

イスフが慌てて振り返ると、馬車からいつの間に出て来たのか愛娘のスファミナが、護衛の一人に抱きつかれてもがいていた。

加えてさきほど腰掛けて動こうとしなかった数人の護衛達も、嫌な笑みを浮かべながら周りを取り囲んでいる。

『護衛どもめ、役立たずの上にか！まったく、質の悪い！』

イスフは、慥然としたような外見を保ちながら、内心歯ぎしりをした。

ここで慌てたり怯えたりなどして、相手を図に乗らせるような下手な対応を見せたら、最悪、護衛達が野盗に化けることも有り得る。

「離して！離しなさいってば！！」

冷静に思っているにも、愛娘の嫌がる声がイスフの胸をかき乱す。

生死をかけた戦いの後、気が高ぶるものがある。

特に戦場をあまり経験していない若者が危ない。

リーダーがいれば、新人であろうとシツカリと抑えが効いたのだろうが、先程の戦いで死亡してしまった今、目の前に若い娘を見て欲望に流されてしまったようだった。

『だから、馬車に中に入ると言ったのに！』

イスフは、娘の考え無しの行動に腹を立てながら、口を開いた。

「護衛として雇った者に、そんなことをして貰っては、困るな」

「うるせえ！こんな目に遭ったんだ！少しくらい良い目見せて貰っ

てもいいだろっ!!」

「そうだよな。もう少しで死ぬところだった。報酬に色つけてもらわなきゃ、割に合わねえ」

「お、お父様……」

スファミナを捉えていた男が、イスフに顔を向け叫ぶと、その周りの護衛達も賛同した。

こちらを見てホツとしたような顔になったスファミナに、目で大人しくしていると語りかけ、相変わらず外面は平静を保つイスフだったが。

『言つに事欠いて、報酬を増やせだと……？結果を出さない仕事で、まだ金を貰えると思っていたのか』

それでも呆れ返った心の内をそのまま言う訳にはいかず、イスフは落ち着いた声音で愚か者達に語りかける。

「報酬か……確かに危険な仕事だったが、最初から分かっていたことではないかな。お前達の隊長は、腕の立つ見込みのある若者達を集めた、と言っていたが」

「……隊長が」

「ああ、すっかりとした立派な若者達だから心配はいらないと……そんな真似をしては、お前達を信じていた隊長の顔に泥を塗ることになるだろう。危険手当は考えよう。落ち着いて護衛の仕事に戻って欲しい」

「ホントか!？」

「ああ、嘘はつかん」

『今回は払うさ……もっとも二度とは仕事を頼まないし、仲間にも伝えて、ここ近辺では仕事につけないようにするが、な』

「さ、仕事に戻ってくれ」

「あ、ああ……」

愚か者どもが頷いて身体の力を抜き、これで治まるかと思った時だった。

「いやいやいやいや。お前達、騙されてるって」

皮肉な声と共に、中年の護衛が荷馬車の陰から現れた。その場にいた年の若い護衛達がざわつく。

「え、騙されて!？」

「何が……」

「……………どういことだ」

一人だけ、汚れも何もしていない中年の男は、顔に嫌な笑みを浮かべていた。

トントンと、こめかみを叩きながら言う。

「ちっと考えてみるって。俺達はな、仕事に失敗してんだよ。途中

で何だか変なヤツが乱入してきて、助かったけどな。あのままなら、皆殺しだ。そんな役立たずにまともな商人なら金出すわきゃないだろうが」

「え、いま、払うって言っただろ」

「ちゃんと約束してくれたぞ」

「ホント馬鹿だね。お前が抱えてる嬢ちゃんは、その雇い主の娘だぞ。娘を傷物にされたく無いからデタラメを言ったんだよ。全く、コレだから世間知らずは」

若者達が、お互いの顔を見合わせた後、スファミナとイスフを交互に見る。

「そんな事は無い。私は約束を守る男だ」

イスフが若者達に少し声を強めて話しかけるのを、中年の男が鼻で笑った。

「ハン。信じられるわきゃないだろうが……いや、待てよ。それなら今、払ってもらおうか」

「何……」

あまりの台詞に、イスフが一瞬呆れて、言葉に詰まったのを良い事に、男はベラベラとまくし立てる。

「そつだそれがいい。金を貰ったら、俺は此処でおさらばするぜ。大体、あの変な魔法使いがどれだけ強くても、アジトにはまだ襲っ

てきた奴等の倍の数が居るんだ、早くしないと山賊が戻ってきちゃう。そうだったら、今度こそ終わりだからなあ……お前らはどつするんだ？」

「倍……それが本当なら、ヤバくないか」

「ああ、来たら今度は、殺されるかも」

「……お、俺は……死ぬのはごめんだ」

『このままでは、マズいな』

狼狽え始めた若者達にイスフが眉をひそめた時。

「お前が、山賊を手引きしたのね！」

今まで大人しくしていたスファミナがいきなり叫んだ。

「おいおい、いきなり何を言って……」

「一味でなければ、なぜアジトに倍の人数が居るって知っているの？それに、この騒ぎで汚れどころか、汗一つかいてないなんておかしい。きっと山賊を手引きした後、何処かに隠れてたんでしょ！」

一気に畳み掛けたスファミナは、中年男を睨みつけながら護衛の若者達に言葉を継ぐ。

「この騒ぎを起こした張本人、そして……貴方達の隊長の敵はアイツよ……」

「ああ、そついや……」

「ま、まさか……でも」

その場にいた者の視線が男に集中する。

確かに男には、激しい戦闘の痕跡は微塵も無かった。

若者達の顔に疑惑の色が浮かび始めた時、

「いやいや、勘弁してくれよお」

皆の注目の的になった男が大きく否定するように手を振り、苦笑を浮かべながら、スファミナの方へ歩き出した。

「人に疑いをかけるのは良いけどな……」

頭を掻きながら、何気ない風にスファミナとスファミナを抱えた若者の前に立った男は、一つ溜息をつく。

「……自分の身が安全じゃ無い時はやめておいた方がいいぜつと！」

中年男と若者の間に、キラリと光が流れたと思うと。

「ぎゃあああああ」

今まで、スファミナを抱えていた若者が、血の吹き出した腕を抱えて地面に転がり。

中年男が、返り血を浴びたスファミナを若者の代わりに抱えて、大ぶりのナイフをその喉元に突き付けていた。

「ひ……」

スファミナが恐怖で硬直し、周囲の空気が緊迫の度合いを一気に増した。

「痛え、痛え、痛、ぐがつ」

「少し黙れ」

足元の若者の喉を足で踏みつけた男が、煩わしそうにぐっと力入れて、そのまま踏みじった。

「ぼつと、口から血の泡を吹き出して若者が沈黙する。

「全く、俺は手引き専門で荒事は苦手なんだっての……」

「す、スファミナ！」

男の凶暴さに、戦いたイスフが思わず娘の名を呼んだ。

その様子に中年の男は、ニヤリと笑う。

「どうやら、可愛い娘を見捨てるような薄情な親父じゃないか……良かったねえ娘さん。アンタの命をお金で買ってくれるみたいだぜ。なあ、旦那？」

これ見よがしに、ピタピタとナイフの腹で、スファミナの白くて滑らかな首を叩いて見せる中年男。

「……分かった。払おう。いくらだ？」

大人しく払ったところで命の保証はない、ということを知っているイスフだが、他に手は無かった。

「ん、そうだな……」

中年の男が、少し考え込んだ時。

「全部やつつけて来たぜえ！……って何してんだ？」

中年男の背後から能天気な声が響き、一人の少年が現れた。  
素材不明の服装は全てが黒い。

背中に背負った大剣の鞘や柄までが黒いという徹底ぶりだ。  
銀色の髪に紅い目という特異な容貌をした少年は、振り向いた中年男が手にしたナイフを少女の首に突き付けているのを見て、目を大きく見開き。

「ちよっ！そりゃ駄目だろっ！」

と、声にしたと思った次の瞬間。

「な……」

一瞬で。

本当に一瞬で今までいた場所から姿を消した少年は、中年男の真ん前で、そのナイフを二本の指で摘まんでいた。

「美少女に何してんだ、おっさん。美少女は、世界の宝物なんだぞ！イジメちゃダメ。ゼツタイ！」

「な、な、なんだお前は……」

今まで余裕を持っていた中年男の慌てぶりと言ったら、滑稽な程

だった。

顔を真っ赤にして動かそうとしているのだろうが、少年が軽くつまんだように見えるナイフは、固定されたかの様に動かない。

「ふ……俺か。俺は……世界を穿つ神速の英雄、ジークフリート・フォン・ユグドラシルさ！」

名乗りを上げると同時に、少年は左手で髪をかき上げる。その無意味な動作を隙と見たか。

「……………くっ」

中年男は、ナイフから手を離すと、懐に手を差し入れた。別の武器を取りだそうとしたらしかったが。

「甘いつて……………」

周囲の人間が、注目していたのにも関わらず、またもや、途中の動作を飛ばしたような現象が起きていた。

少年は、いつの間にか男からスファミナを奪い返して片手で抱え、ナイフを押さえていた筈の手を中年男の鳩尾に人差し指を伸ばす形で突き付けていた。

「BANG！」

イスフには聞き慣れない呪文を、一言少年が唱えたかと思うと、中年男は身体をくの字に曲げ後ろに吹き飛んだ。途中で荷馬車の側面に当たって跳ね返され、そのまま地面に崩れ落ちる。

『短詠唱呪文……………』

イスフは、ゴクリと唾を飲み込んだ。

背中に背負った剣がハツタリでないのなら、魔法剣士ということになるのだろうか、短詠唱で魔法を使える魔法剣士など、イスフは今まで聞いたことも無かった。

英雄という名乗りも、まんざら嘘では無いのかも知れないと、イスフは思う。

イスフが、固まったまま動けないでいるうちに、少年はスファミナを軽々と抱きかかえたまま歩を進め、こちらに近づいて来ていた。

「お前、怪我は無いか？」

「はい……助けていただいて有難うございます……ジークフリート様」

少年の、いささか乱暴な口調だが、スファミナを心配しての問いに、娘が他所行きの声で答えているのを聞いて、イスフはギョツとした。

『ま、まさか……』

自分の目が信じられないイスフだが、間違いなくスファミナの頬が紅く染まっていた。

今まで、一度も浮いた話の無かった娘の、もしかしたら初恋なのでは無いだろうか。

騎士になりたかった娘としてみれば、自分の危機に駆けつけ、あつという間に敵を倒した少年は、まさに理想の騎士なのかもしれない。

しかも登場した時の台詞からすれば、少年はこの短時間で、山賊

を、アジトにいた者達も含めて、あっさりと倒して来たらしい。

「英雄……か」

思わず漏らした一言に、その背後で女戦士が引きつった顔をしていたのだが、少年に注意を奪われたイスフは、終ぞ気づくことは無かった。

## 英雄志願（後書き）

お気づきだとは思いますが。

ジークフリートは、長谷一哉です。

単純な戦闘能力で言えば、6人の中で一番かも？

## 始まりの町

### 第六話 始まりの町

街道沿いの町は、小さかった。

街道沿いと言っても、街道が中心を通っている町ではない。

街道から分岐したやや太めの道が山の方に伸びている先にある町だ。

分岐した道の街道に近い方には、左右に間隔をおいて細い道が数本更に枝分かれし、細い道一本ごとに農地と大きめの農家が貼り付いている。そこから少し上に行った所に、やや大きな塊になって数十軒の家々が建っているのだが、いつそ可愛らしいといっても良いくらい本当に小さい町だった。

その町から山の上まで細い道が続いているのを見て、

『あれは、放牧か何かの為なのかなあ……まあ、こつちの世界ではどうだかわからないけど』

藍田<sup>あいだしんすけ</sup>康介は、心の中で呟いた。

一見すると、中世の農産物や畜産物を基本とした自給自足型の町のように見えるが、ここは魔法世界、思わぬ落とし穴があるかも知れない。

むーっと康介が唸っていると。

「前に家族旅行で行ったドイツとかスイスの田舎町に似てます」

並んで歩を進めていた鈴木麻世<sup>すずきあせ</sup>が、独り言の様にぼそつと囁いた。どうやら麻世も康介と同じ様な印象を受けていたらしい。

「んー、田舎町かあ……この分だと、店は雑貨屋が一軒とかになるかも知れないね」

「まさか、宿屋がなかったりするのでしょうか……」

「うーん、街道が町の中心を通ってないって事は、旅人を相手にした宿場町じゃないってことになるから、宿屋が無い可能性もあるかな……酒場の二階が宿兼ねてたりとかは、良く西部劇とかであるんだけどね」

貿易会社を営む両親に連れられて幼い頃から色々な国を旅して来た麻世と違い、一般家庭に生まれた康介は、本や映画の知識を元にした推測しか出来ないのです、どうしても自信なさげな口調になる。

話しているうちに農家地帯を抜け、小さな町の入り口に立った康介と麻世は、周囲を見回しながら、そのまま町の中に足を踏み入れた。そこには石と土壁、それに木材で構成された中世ヨーロッパ風の家々が並んでいた。

「参ったな。店とかの見当がつかないや」

「看板らしきものも出てませんね。あ、そう言えば、はせくら長谷さんが言っ  
てましたね、村とか町に着いたら『ギルド』を探せって。てんぶ  
れ？だとか何とか」

「言ってたね……そう言えば、『ギルド』かあ、この世界は魔法があるなんてファンタジックではあるけど、ファンタジーフィクションじゃ無いからね、本当にあるのかな。あつても、こんな小さな町に支部があるかどうか……それより、まず人に話しかけて見るのが先かな。一応、言葉には不自由しないと塾で説明されたけど、確か

めたいとこだね」

「今まで、全然人に会ってませんよね。まだ日も高いですし、いくらなんでも不自然だと思っうんですけど」

康介の台詞に、麻世が首を傾げながら応えた。

いくら田舎町だとは言っても、住人の姿を一人として見ないのは確かに奇妙だった。

「確かに。んー。一旦、ここで止まろうか」

話している内に、二人は町の中心部らしき円形の広場にたどり着いていた。

石畳の広場を囲んでならんでいる家の幾つかが、少し大きめだったり、入口が両開きになっていたりと他の家と造りが違うものも数軒ある。

「何か、それっぽいですね」

「そうだね。ここが中心かな」

頷いた麻世が、顔を見上げてくるのに、康介が頷いた時だった。

カーン！カーン！カーン！

という甲高い音が遠くから響いてきた。

金属音では無い、木の板が何かを叩いているような音だ。

「な、何でしょう？」

「何だろう」

二人が、顔を見合わせていると。

「あ、あんた達！早くこつちへお出で！早く早く！」

突然、二人の背後から焦った声が聞こえて来た。

二人が振り向くと、一軒の家の扉が開いて、そこから半身を覗かせた中年の女が慌てた様子で手招きをしていた。

「えっと……」

「ん、どうやら誘いに応じた方が良さそう。応じないと悪いことが起きるっぽい」

康介は、麻世の手を掴むと、女の方に小走りで駆け寄り、家の中に足を踏み入れた。

家の中は、昼間だと言うのにほの暗く、明るい所から駆け込んで来た二人は、一瞬足下が見えなくなって転びそうになった。

背後でボタンと大きな音がして、薄暗さが増す。

振り返ると、叩きつける様な勢いで扉を閉めた中年の女が、大きく息を吐いていた。

「はー、良かったよ、間に合って」

二人に向き直った中年の女は、大きく笑みを浮かべると、康介と麻世をじろじろ見ながら口を開いた。

「あんた達、見慣れない格好しているけど、遠いところから来たのかい？」

「ええ、そうです。かなり遠いところから来ました」

昼間なのにかなり薄暗い室内を珍しげに見回していた康介が答えると、中年の女は得心したように頷いた。

「道理で。もうすぐポラルの通る時間だって言うのに、暢気にふらふらしてるから、おかしいと思っただよ」

「……ポラル、が通る？」

麻世が意味不明の言葉に首を傾げると。

「ポラルも知らないなんて、どれだけ遠くから来たんだい」

中年の女は、飽きたように言った。

「ま、わたしが下手な説明するより、もうすぐ通るからね。その壁に明かり取りの窓があるから、外を見ててごらんよ」

女が指差した壁に、縦60cm横90cm程の木板が四角く嵌め込まれ、一辺10cm程の菱形が四つ、くり抜かれている。

そこから、外の光が差し込んでいた。

「はい、ありがとうございます」

いろいろ聞きたい事もあったが、ここは女の勧めに従うことにした康介は、その光の方に足を進めた。

麻世も後から付いてくる。

近付いて分かったが、この窓には、外側にもう一つ錠戸を持つ二

重構造になっているようだった。

雨や風がひどい時には、それで対応するのだろうか。

『これが窓か……ガラスじゃないってことは、発明されて無いか……高価すぎて普及して無いのか、どっちかな』

持って来た怪しいお土産シリーズの中のガラスや透明なプラスチックを使った品物。

それがいくらくらいになるのか、と思いながら康介は菱形から外を覗いてみる。

「……何が通るんでしょうね」

窓に四つほど開いた菱形の下の一つから、同じように外を眺めていた麻世が小さな声で康介に聞いて来た。

「何だろうね。通るって言うんだから、何かの生物だと思うけど」

「もうすぐ来るよ。ほら、音が聞こえてきた」

二人のとぼけたやり取りが面白かったのか、後ろから中年の女が笑いを含んだ声で告げた次の瞬間、ドドドドドという音が聞こえてきた。

「足音？」

「それもたくさんだね」

二人が見守る広場の山側の入口から、ものすごい勢いで、山羊のような動物の集団が走ってきた。



「人が誰もいないから、どうしたのかなと思っていました」

「ははは、逆にアタシは、何で外に出てる子がいるんだってビックリしたよ」

メランカと名乗った中年の女は、麻世の台詞に大笑いをした。

「あれが、毎日ですか」

「この季節はそうだねえ。何せ、餌場が山の上になるからね。昼間は良いけど夜に山に置いておいたら、魔獣に食われちまうよ」

「……魔獣、が出るんですか？」

「ああ、出るね。だけど、こちら辺は昼間に暴れるのは出ないし、町まで降りて来るようなことも、滅多に無いからね。まだまだマシな」

「魔獣……退治とかはしないんですか？」

「無理無理、そこらの獵師や町の自衛団じゃ齒が立つもんかね。あんまりヒドイようなら領主様に訴えることになるけどねえ。この程度じゃわざわざ来てくれないよ」

諦めた表情のメランカに、康介は、質問を投げかける。

「魔獣は、かなり強いと言つことですか？領主様じゃなくても、部下の兵士とか騎士とかを派遣してくれるように頼むとか、町で腕の立つ強い人を雇うとかじゃ駄目なんですか？」

「は、ここら辺じゃ、魔獣と戦えるのは、魔法を使える領主様くらいさ。後は馬で2日くらいのとこに騎士団の砦もあるけどねえ。騎士様も魔法を使えるかよほど腕が立つお人じゃなけりゃ、返り討ち普通の兵士なんか束になつても敵いやしないよ。流れ者の傭兵や護衛の中にも、魔法まで使える強者がいるって話だけど、嘘つきの偽者が前金だけ持って逃げちまうとかが多すぎてね。雇おうなんて考えるヤツはいないね」

「信用されてないってことですか」

「まあ、そうだね。ヒドイのになると、領主様から依頼を受けて来たと言つて、散々町で飲み食いした後、そのまま逃げ出すヤツもいるらしいよ」

『と言うことは、「冒険者ギルド」とか無いってことか。それ以前に「冒険者」という定義も無さそうだな』

少々、と言つかかなりのゲーム中毒っぽい長谷一哉はせくわいちやの力説していた「最強能力使つてギルドでお金稼いでウハウハ」が出来なさそうだ、と少しガツカリする康介。

『まあ、プレイヤーにお金を稼がせるためには都合が良い、ゲームならではの都合主義的アイデアだから期待はして無かったよ…  
…希望はかなりしてたけど』

同じくモンスターを倒したらお金が出て来るなどのゲーム上での約束事は、この世界には無いと思つた方が良さそうだな、と康介は判断しかけたが。

『いや……待てよ、ギルドランクSの能力とか証明カードとかを望んでいれば、もしかしたらギルドあつたんじゃ無いのかな……』

ゲームのようにでは無いが、「有り得るものは有り得る」というご都合主義的法則で世界が選別されるなら、十分選択可能な範囲だったのでは、と思いつき。

失敗したかと、少々、落ち込む康介だった。

「あ、少し話は変わりますが、この町には宿屋は無いのでしょうか」

落ち込む康介の隣でカップを両手で持ち、ふーふーと冷ましながらお茶を飲んでいた麻世が、メランカに尋ねた。

「宿かい……そうだね、無いことも無いけど。あそこは、あんまり良いとこじゃ無いからね。子供だけで泊まりに行くのはねえ……そうだ、もし良かったら、このままウチにお泊りよ。去年、嫁に行つた娘達の部屋がそのまま空いてるから、丁度良い」

『子供つて……いや、僕はともかく麻世は子供か』

メランカの気前の良い申し出を、最初断ろうと思った康介だったが、隣の麻世を見て思い直した。

「ええと……もしかして酒場の上とかが宿屋になってたりしますか？」

康介の問いに、大きく頷くメランカ。

『酒場の上の宿屋で、子供だけの宿泊が好ましくないって事は……』

いわゆるムフフで怪しげな用途にも使われてるんだろっな、やっぱり。麻世には刺激が強いか』

「そうですか……それなら、ご迷惑でしょうが、お言葉に甘えます。よろしく願います」

麻世の為に、思い切ってメランカの好意に甘える事にした康介は、頭を下げた。

「任せなよ！にしても、その頭を下げるのは、あなた達の地域の風習なのかい？ここら辺じゃ、見たことも聞いた事もないから、よっぽど遠くから来たんだねえ」

メランカは、カラカラと笑って頷いた。

-----

その晩は、娘達が使っていたという部屋に、二人一緒に泊まる事になった。

どうもメランカには、二人が相当年下に見えているらしい。

子供同士なんだから、男と女が同じ部屋でも問題ないだろうとの事らしかった。

これが噂の東洋人補正というものだろうか、と康介は苦笑した。いざとなれば、床で寝ようと思っていた康介だったが、メランカの娘は二人だったらしく、ベッドが二つ置いてあったので、ホッとした。

「まあ、これからの事を相談できるし、安全の面からも同じ部屋で良かったかな」

康介の危険察知能力は、生来のものだけでも十分なのを、獲得能力で底上げしてるのでかなり確実性がある。

異世界で何があるか分からないという事を考えれば、安全に越した事はない筈だ。

「そうですね……でも、ちょっと恥ずかしいです」

麻世が可愛らしく頬を染めて言うのに、

「そうかぁ。僕は、怖い夢見た妹と良く一緒に寝たりもしてるから、あまり気にならないけどね」

と康介が返し。

「そ、そうですね……」

微妙に麻世が引き気味になったのは、さすが「フラゲクラッシュ」  
「康介の成せる技と言ったところだろうか。」

「それにしても、メランカさんと話せたお陰で、かなり色々な事が分かって嬉しかったね」

「はい。何より、メランカさんが女性だったので、心配してた事が聞けて良かったです」

「そうなんだ？どんなこと？」

「そ、そんな事言えません！」

「ええ！？聞いちゃいけないことなんだ」

「当たり前です。もう」

「い、ごめん？」

何故か頬を染めながら怒る麻世に、地雷を踏んだらしいと察した康介は、とりあえず謝った。

それは、康介が女系家族の中で暮らすうちに身についた哀しい習慣だった。

## 始まりの町（後書き）

視点をくるくる変えると読みにくいでしょうか。

んー、もう少し話数が多くなってくれば、味になるはず？と信じています。

次は誰の視点で書こうかなあ。

## 始まりの町2

### 第七話 始まりの町2

康介と麻世こいすけ まよがメランカの世話になって3日が過ぎていた。

情報がある程度仕入れることが出来た時点で、すぐに次の町に向かつて出発しようとした二人だが、子供だけで旅をさせられないというメランカに引き止められていたのだ。

大人しく受け入れていた理由としては、数日後に来る行商人と一緒に往けるように頼んであげると、メランカに言われたのが、大きかった。

車や電車での移動が当たり前の現代っ子の二人にとっては、次の町まで歩かなくて済むというのが、正直有難かったからだ。

獲得能力で身体強化をしているので、歩くことそれ自体には何の苦勞も無い。やろうと思えば、一番年下の麻世でさえ丸一日歩き続けても平気なはずだ。

問題は、ただひたすら歩き続けるといふ行為そのもの自体が苦行だということだった。

街中を歩くのと違って、田舎道というのは、ほとんど景色が変わらない。ありていに言えば、ただひたすら退屈なのだ。

この世界の人間であれば、それが普通。退屈やじれったいという気持ちは抱かないのだろう。

だが、1時間の移動距離が数十キロという感覚に慣れている康介達には、目に見えている場所まで移動するのに何時間もかかるということが、ストレスを生む。

速度や距離に対する感覚というものが、徒歩が普通だった昔の人間と乗り物を利用する現代の人間では、大きく異なるという説

を本で読んでいて知ってはいたのだが、最初の森から今いる町までの移動で、なるほどこういうことなのかと実感した康介だった。

そういう情けない理由で、村に滞在していた二人だが、待っている間に、いろいろ細かい生活習慣などを教わっていたので、まるきり無駄という訳でもない。

特に今日は、村に一軒の雑貨屋に、メランカに連れて来られていた。

「ちょっと、これを見て欲しいのですが」

康介は、田舎町でも換金出来そうだと思った小ぶりの純金の粒を3つほど見せてみた。

この世界でも金は貴金属だと、メランカから聞いてはいたが、換金の手数料その他については、田舎町に住む一般人であるメランカ自体に知識が無いので、分からないままだ。

「金！本物か！？」

「間違いなく純金です」

「確かめさせて貰って良いか？ここにや、魔法の鑑定板なんて結構な物が無いから、少々、手荒な方法になるが」

店主はカウンターの引き出しから小さなタガネとハンマーを取り出すと、康介をちらりと見て許可を求めた。

康介が頷くと、タガネをカチンと打ち付けて、粒を半分にした。

断面をシゲシゲと見た後、今度は黒い石の上に粒を擦り付けて線を引き、その隣に、また引き出しから出した細い金色の棒で同

じ様に線を引く。

更に小瓶から怪しげな液体を黒い石にかけたり、灰色の粉をパラパラと振りかけたり、と複雑な作業を一通りこなした後、小さく唸った。

「……本当に純金みたいだな。坊主、これをどうやって手に入れた？まさかとは思うが、犯罪に関わってたりしないだろうな」

年取った店主が、ジロリと康介を睨んだ。

「変な言いがかりは止しとくれ。コースケは、とても良い子なんだ。悪いことなんかする筈無いよ」

実は異世界から持って来ましたが、などとは言えず困った康介だが、後ろからメランカが強い調子で口添えしてくれた。

この数日間ですっかりメランカの信用を勝ち取っていた康介だった……と言っても、ほとんどは、礼儀正しく躰が行き届いた麻世の功績なのだが。

メランカの様子を見た店主は、ぐっと寄せた眉間のシワを緩め、頷いた。

「……メランカがそこまで言うなら信用するとするか……そうだな、一粒、銀貨2枚と銅貨50枚で良いなら引き取るう」

「たしか、田舎だと金貨一枚で1ヶ月か2ヶ月生活出来るとメランカさんは言ってたなあ。金貨一枚が銀貨10枚で銀貨は銅貨100枚だそうだから、銀貨は大体1万円、銅貨は1000円くらいかな？」

記念用など飾っておくものでも無い限り、金貨は必ず混ぜ物

をされている。純金のままだと、柔らかすぎて、すぐに磨耗したりゆがんだりする為だ。

とは言っても、普通、金貨の価値は、そこに含まれる金の含有量が基準になるので、純金なら金貨と同じ様に取り引されても良い筈なのだが、いちいち確かめたりする手間がかかる分、手数料がかかるということになる。

『ええと、金貨の大きさが銀貨と同じくらいなら、純金の粒3つで一枚の金貨分かな？金貨一枚分を銀貨7・5枚で交換かあ。まあ、いくらメランカさんが言ってくれても、完全に信用出来ない初見の客に対してなら、儲け込みでそんなものかな？』

メランカの口利きが大きいとは言え、店主は業突く張りな見かけよりは、やや正直者みたいだなと康介は思った。

『もしかしたら、損するかもだけど、お金はすぐにも必要だから、仕方ないか』

「分かりました。それをお願いします」

康介が、覚悟を決めて頷いた時だった。

カ、カカカカカカカカカカカ！

ポラルの通過を知らせる板木ばんぎが乱打される音が、響き渡った。まだポラルの通過には早すぎる時間に、狂ったような叩き方。板木は、江戸時代などに火事などを知らせた半鐘はんしゆの前身として日本でも用いられていたくらいだ。

同じように何かの非常事態が起きたのだらうという康介の推測は、

「康介、麻世！すぐに家に戻るよ！」

普段はどんと構えている肝っ玉母さんみたいなメランカの、切羽詰まった様子で裏打ちされた。

「一体、何が……」

麻世がメランカに尋ねようとしたが。

「話は後後、ソルジユ、悪いね、また後で来るよ」

メランカは、気ぜわし気に店主に声をかけ、カウンターの上の買い込んだ荷物を抱えると、当惑する麻世を出口の方に押して行く。

「ああ、早いところもどった方が良い」

店主もカウンターから出て来ると、窓の方に向かう。どうやら、鎧戸を閉めるつもりのようなようだ。

「ほら、コースケも早くお出で」

メランカが出口で振り返り康介に声をかけた。

「あ、はい」

反射的に答えたものの、金の粒の代金をまだ受け取ってなかった康介は、一瞬躊躇した。

「坊主、心配いらないぞ。次来た時までには、代金揃えとくから。今は、早く戻ったほうが良い」

狭い町での信用商売。メランカの知り合いなら大丈夫だろうと納得した康介は、店主に向かって小さく頷くと、メランカの後を追った。

-----

デサントランツ公国という国がある。

この世界の人々の認識では「世界」とイコールである「大陸」、そのほぼ中央に位置する小国である。長細い三日月のような変わった形をしている国土のせいで、狭い面積にも関わらず複数の国と国境を接していた。

うち2つは、かなりの大国なので比較対象から当然抜くとして、他のどの国と比べても、デサントランツ公国は小さい。何かの国が野心を抱けば、あつという間に侵略を受け、滅ぼされてもおかしくない程の小国だ。

そんな小国が長い間生き延びて来られたのには、もちろん相応の理由がある。デサントランツ公国が唯一他国と接していない国境（弓なりの国土の内弧側）に存在する「魔の森」が、それだ。

「魔の森」とは、その名の通り魔物が跋扈する森である。

歴史書には、300年ほど前、デサントランツ公国の前身である「ランツ帝国」が、ある日突然、帝国の首都に出現した「魔の門」から溢れ出した魔物達に滅ぼされた、と書かれている。

ランツ帝国は、当時まさに唯一無二の大国であり、大陸全土をほぼ征服していたと言っても過言ではないほど強大な国だったが、魔物が王都に出現した当初に帝王を失った（伝説では、魔王

と相打ちになったと伝えられている) 為に、信じられないほどの速度で瓦解していき、その広大な国土は混沌と魔物によって呑み込まれてしまった。

歴史書は複数存在し、それぞれ編纂した学者や国の主義主張によって、いくらかの偏向はあるものの、大筋では変わらない。

その記述によれば、混沌に呑み込まれたランツ帝国の領土を周辺国が魔物と戦いながら少しづつ切り取り、王都付近まで数十年かけて辿り着いてみると、元の場所で一步も引かず魔物と戦い続けた集団が、ランツ帝国の正当継承国と自称するデサントランツ公国を作りあげていた、ということになっている。

デサントランツ公国の歴史は、魔物との戦いの歴史でもある。

デサントランツ公国が主張する「帝国からの正当な継承権」を認めるかどうかは、国によって対応が様々だ。が、公国が「魔の森」の中心部にある王都を奪還するまでは「正式な」帝国からの継承は成立しないと宣言し、王が「デサントランツ公爵」という肩書きのままにいることもあって、外交的な問題は表面化していない。

一方、公国が対魔物戦の防壁の役割を果たしているという誰もが認める事実があり、他方ではデサントランツ公国以外に進んで魔物と戦おうとする国は「無い」という現状がある。

戦う国が無いというのは、魔物に一番有効な攻撃手段が魔法である事が影響している。デサントランツ公国以外の国が戦おうとするならば、主に貴族が矢面に立つ事になる(魔法使いになるためには、遺伝と教育に必要な財力に恵まれていることが必須条件のために、自然と人材が特権階級に偏っている)のだが、情け無いことに自ら進んで前線に立つ貴族は皆無に近いからだ。

どのくらい情けないかと言うと……「小型の魔の森」とも言うべき「魔の穴」と呼ばれる特異点が、ときおり周辺の国にランダ

ムに口を開いて魔物を吐き出す事がある。あくまでも「小型」なので、魔法を使える者が数人いれば、十分対応可能な程度なのだが……その度に自らが魔物と戦うことを嫌った周辺国の貴族達が、対魔物の専門家としてデサントランツ公国から傭兵を派遣してもらっているくらいの情けなさだ。

よって、公国を簡単に潰す訳にはいかないし、また他国に勝手に潰させる訳にもいかない。そんな危ういバランスの上に、デサントランツ公国は存在している。のだが、それは受動的なものではなく、公国自ら狙って対魔物の傭兵国家として生き抜くという、したたかな戦略方針の結果だった。

さて。

康介達のいる町から馬で2日ほど行った所に小さな城砦があった。

ここは「魔の森」の際に位置していて、まさに傭兵国家デサントランツ公国の最前線と言っても良い場所だ。

だが、最前線にも関わらず、城砦のとある一室には春のひだまりのようなノンビリした空気が流れていた。

「最近、平和ですなあ」

「うんうん、こう何も起こらないと腕がなまるねえ」

最初の台詞を発したのは、毛むくじやらの大男だ。赤毛の髪も顔半分を覆ったヒゲも全てが剛毛。多分、服に隠れた部分も全てがピンピンと立っていることが想像に難くない。

端的に言って「筋肉もじゃダルマ」としか言えない。

だが、声は良い。その魅力ある深い低音で囁かれると、大抵の娘は腰砕けになるといふ。

更に蛇足だが、歌も上手い。彼に愛の歌を捧げられて落ちな

い娘はいないとまで言われていたりする。

対して、間伸びしたような声で応えたのは、サラサラの金髪と深いアイスブルーな瞳が印象的な優男だ。

スラリとした背格好だが、ひ弱ではなく、引き締まった筋肉のせいで細身に見えるだけ。

こちらは歌も歌わず、ただ微笑むだけで女神すら落とせるとの、もつぱらの評判なのは、更に余談だ。

この二人が、デサントランツ公国でも武勇の誉高い「ジルテイス騎士団」のNo.2とNo.3だというと、大抵の者は驚くが、その実力は折紙付きだ。

近辺の国の中では一番大きいサブナン聖国が2年毎に神に捧げる為に行う闘技大会、その前回大会に、二人で9位と10位におさまっている。

それも、ベスト10の試合の一番最初に二人が当たったのが原因で、本来ならもっと上位に食い込んでいる筈だった。下位のトーナメントならまだしも、上位のトーナメントで同国の二人が最初に戦うというのは、どうも作為的なものを感じるのだが、サブナン聖国では、試合の組み合わせすら神のお告げで決められるという建前とになっているので、文句を言う訳にもいかないのだった（ちなみに、十数年前に組み合わせに文句をつけた勇氣ある戦士がいたのだが、彼はそのまましばらく行方不明となり、次に公の場に現れた時には、神に使える敬虔な聖戦士になっていたという話が真しやかに囁かれている）。

同国人だから同じ騎士団だからと言って手加減せず、次の試合をどちらもが棄権せざるを得ないほど全力で戦った結果、10位になったのは「筋肉もじゃダルマ」で、本当の名前は、ガシユバ・タンギーフォス。

種族は人ではあつても、人間ではなく「セ・リオナール」……簡単に言うと「半獣人」だ。

毛むくじやらの上、厳しい筋肉によって年齢不詳の容姿だが、実はまだ25巡歳だ。仲良くなった女性に年齢を告げると驚かれるのが、本人には不本意らしいが。

9位になつたもう片方の名前は、テリナス・ミルビ・タミヴアス。

種族は、人間だそうだが……20代の外見とは裏腹に、実は58巡歳。ガシユバに勝てたのも、年の功と言つて良い。

以前、魔法研究所の女性に年齢を話した時に、研究材料にされそうになって以来、「永遠の20巡歳」で通しているのだが、親子どころか、親子孫の三代に渡つてお付き合いをしたりもしているので、割とバレバレらしい。

「二人とも、弛んでいるのではないか」

そして、この部屋にいるもう一人。

ジルティス騎士団団長のリンデル・イヤヌス・ガルナン・デサントランツ。

20巡歳という若さながら、公国一腕が立つが公国一癖が強いとも言われる猛者共を纏めている。

名前からも分かるとおり、デサントランツ公爵家の一員だが、妾腹の生まれだ。常に最前線にあり、命の危険に晒されるジルティス騎士団の団長に任命されたのも、生まれのせいである。

もっとも、デサントランツ公国は、その成り立ちからいって、実力のある者には評価を与える国風があるので、騎士団をしつかりとまとめて実績を残している最近では、兄妹達を除けば大分風当たりも和らいできていた。

「そう言われましても、訓練だけでは今ひとつ勘が鈍ると言っか…」

「そうだよねえ。魔物の動きはぜんぜん違うから、人間相手の訓練じゃ限界があるよねえ」

二人が、口々に不満を言いたてた時だった。

「緊急連絡です！失礼します！」

慌てた様子の兵士が一人飛び込んで来た。

緊急連絡係はいついかなる時も、即時入室が許可されている。

「マキトラの領主から緊急要請です。震災級の魔獣が現れたそうです！」

その声に、部屋の中が、今までの和やかな雰囲気から、一転、殺気にも似た緊張感を漂わせることになった。

「詳しい報告を聞こう」

リンデルが、落ち着いた声で返した。

後の二人も、引き締まった表情で使者を見つめていた。

「はっ！ここより東のマキトラの町に、1日前に魔獣が現れたとの早馬が参りました。元からいた害のない魔獣を追い払っての出現だそうです。級は間違いなく震災級。一刻も早い救援をとのこと」

「マキトラ…….というと、セランデール子爵領か。あの子爵なら、

「救援を出しても問題はないな」

「ですな。後からなんだかんだと言い掛かりをつけて値切ることもないでしょう。さっそく出撃の準備をいたします。腕がなりますな」

「セラन्दールなら、きっとマリーエちゃんが出てくるね。あの娘の顔見られるのは嬉しいねえ。あんな美人はなかなかいないし、おまけに頭も良いから、会えるのが楽しみだよ」

ガシユバとテリナスは口々に勝手なことを言いながら、リンデルの命令も待たずに相次いで部屋を出て行った。

「良い訓練……というには、震災級は荷が重いかも知れぬが、あの二人がいればなんとかなるか」

二人の背中を見送ったリンデルは、そう独り言ちると、自分も準備をするために立ち上がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5517t/>

---

何か

2012年1月3日21時54分発行